

Title	慶應義塾大学所蔵の土偶について：茨城県内出土資料の紹介
Sub Title	The Keio University collection of Dogu (clay figurines in the Jomon and Yayoi periods), unearthed at archaeological sites in Ibaraki Prefecture
Author	武内, 博志(Takeuchi, Hiroshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.76, No.1 (2007. 6) ,p.83- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070600-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学所蔵の土偶について

——茨城県内出土資料の紹介——

武内博志

はじめに

慶應義塾大学民族学考古学研究室では、戦前・戦後にかけて収集された、膨大な考古学資料を所蔵している。これらの多くは、発掘調査によって得られたものであるが、一部に購入資料・寄贈資料を含んでいる。中には学史上著名な資料も存在する。だが一方で、これらの資料の多くは、正式な報告書が刊行されていないために、これまで略報や部分的な資料提示がなされているのみで、その詳細が報告されないままになっている。こうした未整理・未報告資料の整理・報告は、研究室の急務であり、筆者は、その一環として本校所蔵の土偶の整理を行ってきた。今回はそのうち報告可能となった、茨城県内出土資料の報告を行う。

民族学考古学研究室所蔵土偶の概要

民族学考古学研究室では数多くの土偶を所蔵している。これらの多くは慶應義塾大学・高等学校・中等部の発掘調査によるもので、中には個人の寄贈資料も存在する。その概要は、別表に示すとおりである（表1）。現在、一三五点の土偶が確認されているが、これは今後の整理作業の進展とともに増加することが予想される。資料の内訳は、関東地方五八点（茨城・二二点、千葉・三二点、東京・三点、神奈川・一点）、東北地方五七点（青森・四四点、岩手・十三点）、中部地方（新潟県）一点、出土地の不明確なもの十九点である。时期的には、縄文時代中期二六点、後期三四点、晩期六一点、弥生時代四点、不明（検討中のもの）十点である。時期については今後

の検討で多少変わる可能性がある。

茨城県内出土の土偶について

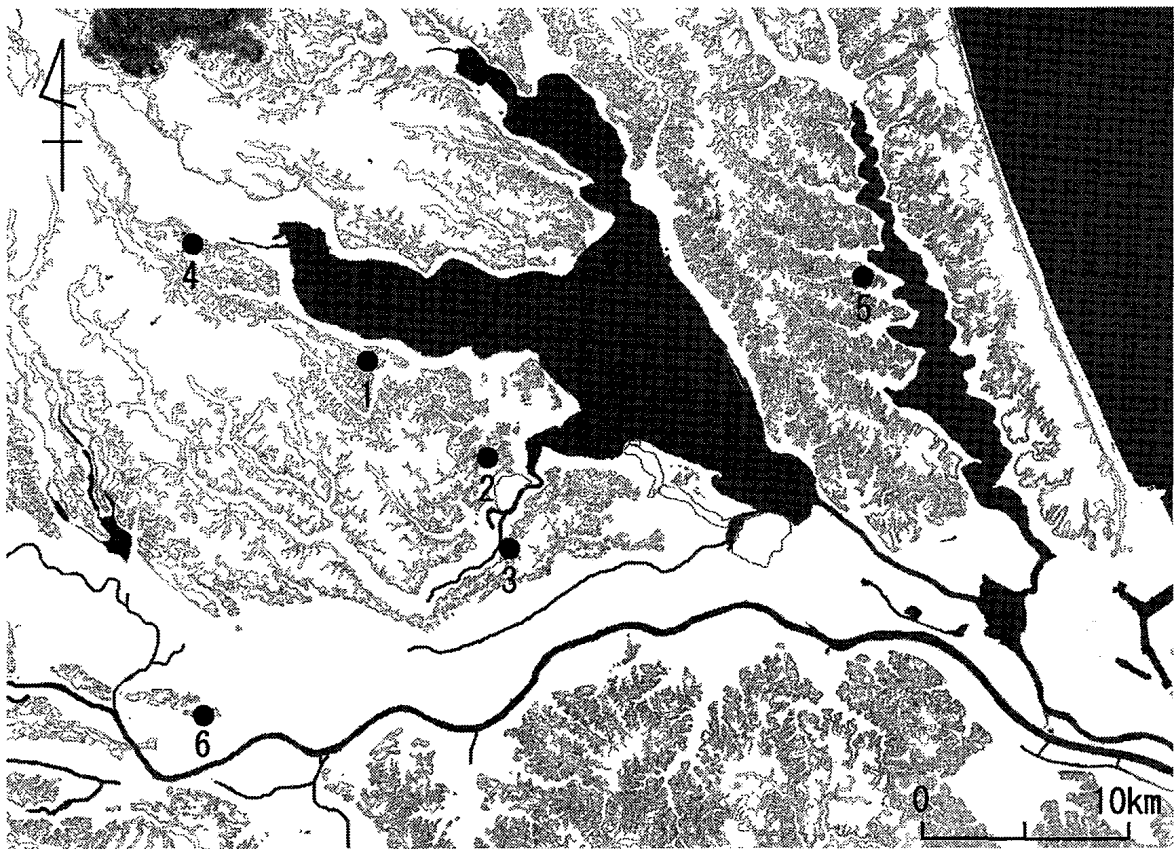
茨城県内出土の土偶は、二二点である。遺跡別に示すと、宮平貝塚二点、佐倉貝塚（南平貝塚）一点、椎塚貝塚六點、上高津貝塚六點、鬼越貝塚（森戸貝塚）三点、立木貝塚四點となる。

宮平貝塚出土資料（第四・五図）

宮平貝塚は茨城県稲敷郡阿見町島津宮平に位置する（第一図一）。このあたりは、桜川と小貝川に囲まれた筑波・稲敷台地の南東部にあたり、遺跡は、霞ヶ浦（西浦）に流入する清明川とその支流によって開析された標高二〇m前後の台地上に立地する。貝塚は大小六ヶ所が環状に点在し、それぞれA～F貝塚と名付けられている。主に縄文時代前期後半～中期の土器を出土する主臈貝塚である。

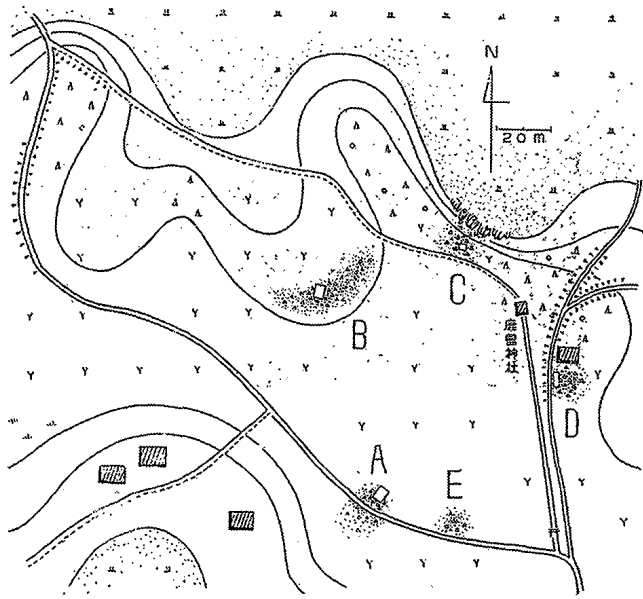
本貝塚出土の土偶は、大山史前学研究所の調査と、慶應義塾高等学校考古学会の調査による二点である。大山史前学研究所調査資料（第四図）

大山史前学研究所は、昭和十四（一九三九）年に



第1図 遺跡位置図

(1 : 宮平貝塚 2 : 佐倉貝塚 3 : 椎塚貝塚 4 : 上高津貝塚 5 : 鬼越貝塚 6 : 立木貝塚)



第2図 宮平貝塚地形図 (大山・大給1940)

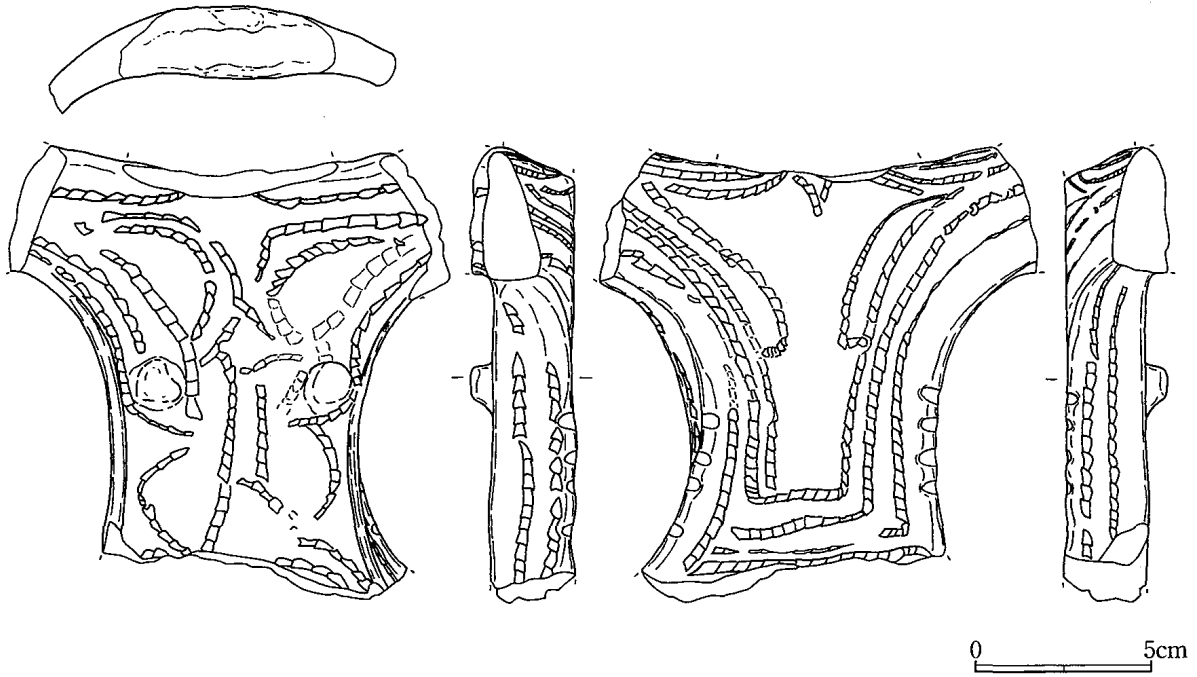


第3図 土偶出土状況 (大山・大給1940)

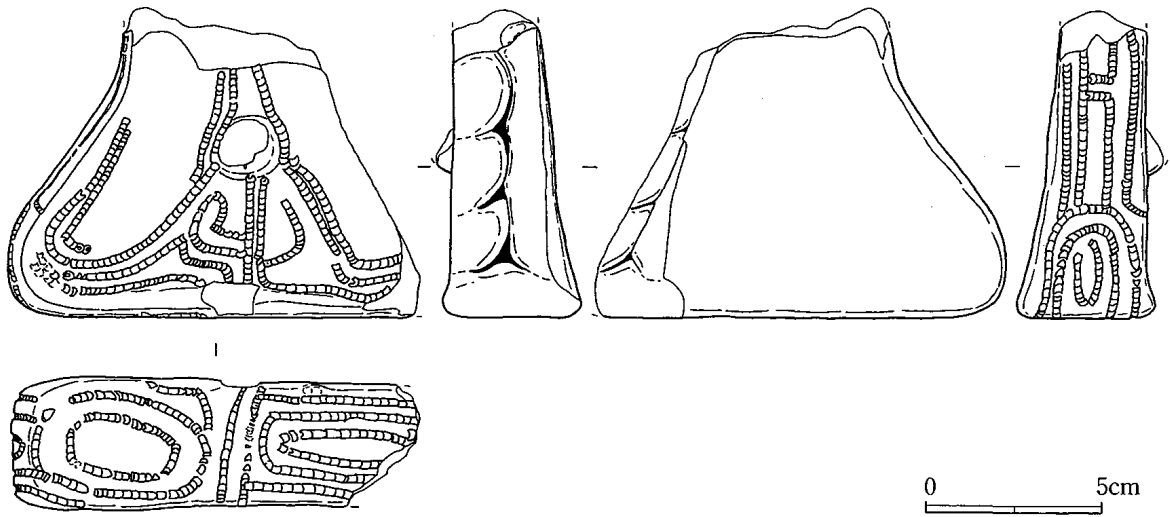
宮平貝塚のA、D貝塚を調査しており、本資料もその際に出土したものである。調査報告によると(大山・大給一九四〇)、出土遺物には、諸磯、浮島、興津式と見られる前期後葉土器、阿玉台式を中心とする中期土器、耳飾と思われる土製品、土器片錘、石鏃、石斧、敲石、骨角器、貝輪や各種動物遺存体などがある。土偶は、D貝塚から出土しており(第二図)、地表下四〇cm、上部貝層に接し、背を上に向けて出土したとされる。出土状況の写真(第三図)と土偶の前後面の写真も掲載されている。

る。
江坂輝彌氏の『土偶』によると、本資料は、「大山史前学研究所旧蔵、戦災で焼失」とある(江坂一九六〇)。大山史前学研究所は、昭和二〇(一九四五)年五月二五日の東京地方の空襲の際、焼失しており、本資料もその時に一時的に瓦礫に埋もれてしまったのであろう。焼け跡には、その後研究所員の何人かが資料を掘り起こしに訪れたらしいので(阿部二〇〇四)、本資料もその際に掘り起こされたものと思われる。

土偶は、中実・板状を呈し、頭部、両腕部先端、胴下半を欠損する。現状で、高さ十二・八cm、幅十二・四cm、厚さ三・〇cmを測る。胴部上端の破断面が、疑口縁のようになっており、頭部と胴部で別々の粘土を貼り付けていた事がわかる。両腕部が前方に若干湾曲し、胴部くびれ部分は、左右とも縁が前方にやや隆起して



第4图 宫平貝塚出土土偶(1)



第5图 宫平貝塚出土土偶(2)

いる。腕部の付根やや下方に乳房があり、先端の丸い台形状に突出する。文様は、竹管状工具による角押文で施され、前面・後面ともに概ね左右対称になっている。全体的に角押文の幅が統一されておらず、太い箇所と細い箇所が見られ、また角押文が波状を呈している箇所が認められるなど、やや粗い施文である。なお、後面のくびれ部分には、側面の角押文の後に、左右四つずつの楕円形の刻みが施されている。文様を描いた後、ナデ調整がされているため、角押文の一部がナデ消され細くなっている。色調は前面、側面が全体的にぶい褐色を呈し、後面はぶい褐色からぶい黄橙色で一部褐色の黒斑が認められる。⁽¹⁾ 胎土には多量の金雲母、砂粒が認められる。焼成は良好である。

本資料には、左腕部分に黒く焼け焦げた箇所が認められる。これは、頭部の破断面にも及んでおり、製作時の焼成によるものではない。史前学雑誌の写真にはこれが認められないことから⁽²⁾（大山・大給一九四〇）、戦災時のものであると考えられる。

慶應義塾高等学校考古学会調査資料（第五図）

宮平貝塚は、大山史前学研究所の調査後、清水潤三氏らによって七回の調査が行われているが（茨城県一九七

慶應義塾大学所蔵の土偶について

⁽³⁾九）、本資料は、そのうち七回目の昭和二六（一九五一）年に行われた調査の際出土したものである。調査は清水潤三氏、竹下次作氏指導のもと慶應義塾高等学校考古学会が行い、D貝塚のうちA・B地点と名づけた二地点を発掘している。調査成果は慶應義塾高等学校考古学会によって報告されており（慶應義塾高等学校考古学会一九五一）、出土遺物には、諸磯式とされる前期土器、阿玉台式を主体とする中期土器、土器片、管玉、管玉状土製品、石鏃、石斧、敲石、石錘、石皿、骨角器、貝輪、各種動物遺存体などがある。土偶は、B地点ほぼ中央部貝層より出土しており、報文には土偶の実測図も掲載されている。なお、清水潤三氏らによる一連の調査で出土した土器については、小林謙一氏による資料紹介、論考がある（小林一九九七、二〇〇一）。

土偶は、中実で板状を呈した胴下半の残欠である。胴部左側を欠損する。現状で、高さ八・八cm、幅十一・六cm、厚さ四・二cmを測る。胴下端が八字状に大きく広がっている。全体的に角ばっており、前面、後面とも下端で僅かに肥厚し、後面はいわゆる出尻状に突き出ている。下面は平坦で安定して立たせることができる。前面ほぼ中央付近に、先端の欠損した円形の突起が貼り付けられる。

八七（八七）

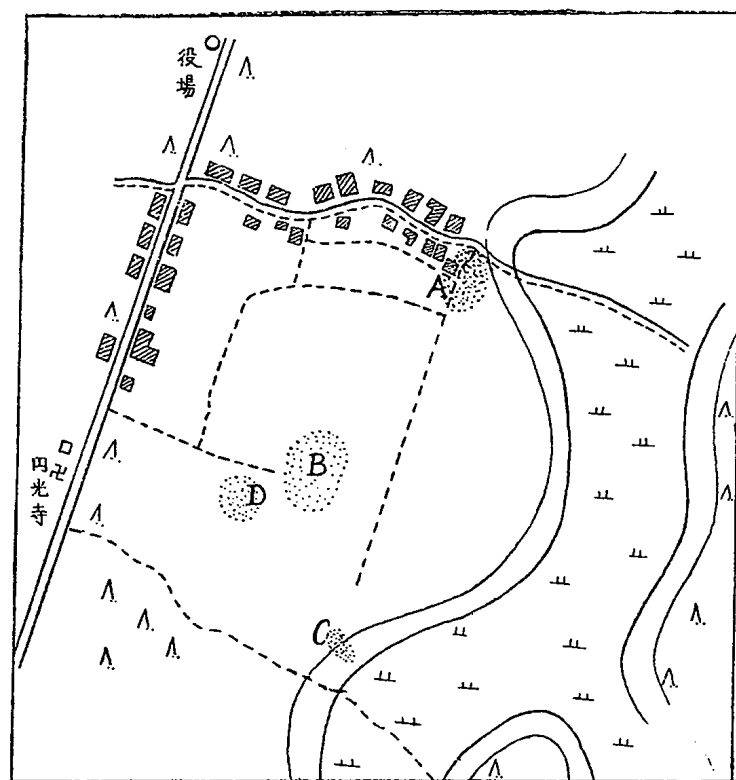
右側の破断面には、粘土の接合痕が明瞭に認められる。

文様は、前面、下面、側面に認められ、後面は無文である。すべて竹管状工具による角押文で施され、全体的に押し引きが短く、一定になっている。前面の文様はほぼ左右対称で、突起の下方には、二列の角押文が八字状に施される。下面は、中央を二列の角押文で左右に分け、それぞれに二列の角押文による楕円形のモチーフが描かれる。側面は、下部にU字・逆U字状のモチーフが描かれ、その先端が下面の楕円を切っている。後面はナデ調整。色調は、前面、側面が黒褐色、下面が明赤色を基調とし、後面はにぶい黄褐色に黒斑が混ざる。胎土には雲母は見られず、非常に細かい砂粒が認められる。焼成は良好である。

佐倉貝塚 (南平貝塚⁽⁴⁾) 出土資料 (第八図)

佐倉貝塚は、茨城県稲敷市佐倉に位置し、小野川が霞ヶ浦 (西浦) に流入する一帯に広がる江戸崎入干拓地の北西部台地上に立地する (第一図二)。筑波・稲敷台地は小野川により東西に分断されており、遺跡は西側の台地上に存在する。標高は二五m前後を測る。

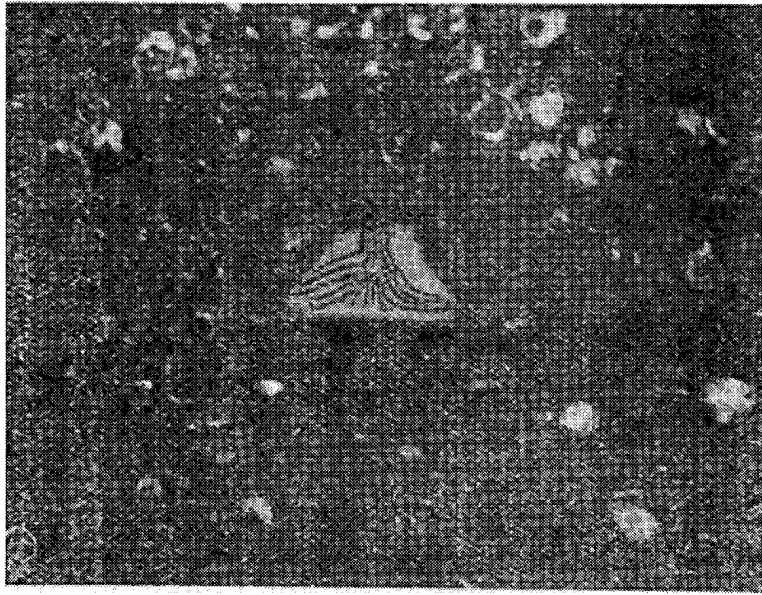
佐倉貝塚の土偶は、大山史前学研究所の調査資料であ



第6図 佐倉貝塚地形図 (池上1943)

る。同研究所は、昭和十四 (一九三九) 年から数回、小野川北西部域に存在する台地を、鳩崎丘陵と仮称し、丘陵上の貝塚を鳩崎丘陵貝塚群として調査を行っている。その報文によると、鳩崎丘陵上に認められる、佐倉貝塚、小松川貝塚、せんげん貝塚、佐倉二宮祠貝塚の四つの貝塚を調査しており、佐倉貝塚、小松川貝塚、せんげん貝塚を縄文時代中期の主鹹貝塚、佐倉二宮祠貝塚を弥生時

代の淡水貝塚と報告している。佐倉貝塚については、台地から斜面にかけての四つの貝塚をA、D地点と名づけ、調査はA、B、C地点を中心として行ったようである（第六図）。出土した遺物には、阿玉台式土器を中心に、若干の加曾利E式土器、土器片錘、打製石斧、敲石や各種動物遺存体などがある。

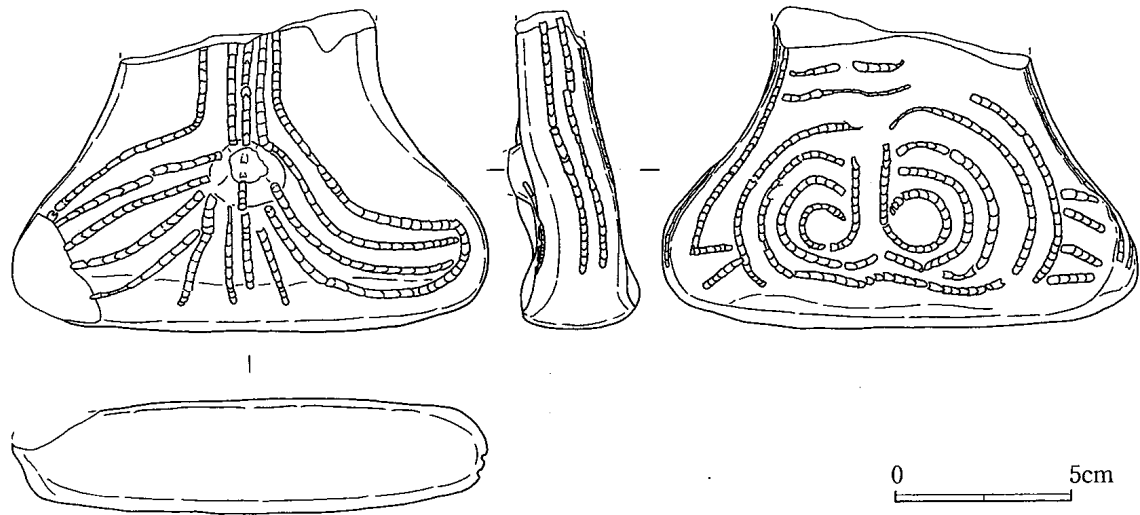


第7図 土偶出土状況（池上1943）

写真（第七図）と土偶の前後面の写真が掲載されている。出土状況の写真をみると、土偶は前面を上に向けて出土したようである（池上一九四三）。なお、本土偶も江坂氏の『土偶』において「大山史前学研究所旧蔵、戦災で焼失」とある（江坂一九六〇）。このことから、本資料も戦災後掘り起こされた可能性がある。

土偶は、昭和十六（一九四一）年に、台地上に位置するB点と呼ばれる貝塚を調査した際に発見されたものである（第六図）。報文によると、地表面から四五cm下の貝層上層部から出土したとあり、出土状況の

土偶は、中実で板状を呈した、胴下半部の残欠である。現状で高さ九・〇cm、幅十三・四cm、厚さ三・八cmを測る。第五図と同様の形態を持つが全体に丸みを帯びており、側面観がやや湾曲する。下面も丸みを帯び、立たせることはできるが、安定しない。前面中央部に先端を欠損した突起が貼り付けられる。文様は、前面、側面、後面に見られ、下面は無文である。すべて竹管状工具による角押文で描かれる。角押文は、幅は一定であるが、節には長短がある。後面は、右側五重、左側四重の同心円状のモチーフを配し、下辺は連結される。同心円モチーフ上部の横位の角押文は右側でナデ消されて途切れたようになるが、本来は続いていた可能性がある。前面、側面、後面はナデ調整がなされ、後面では、ナデにより角押文が細くなっている箇所がある。下面は良くミガかれ、ミガキの単位がわかる部分もある。色調は、にぶい橙色



第8図 佐倉貝塚（南平貝塚）出土土偶

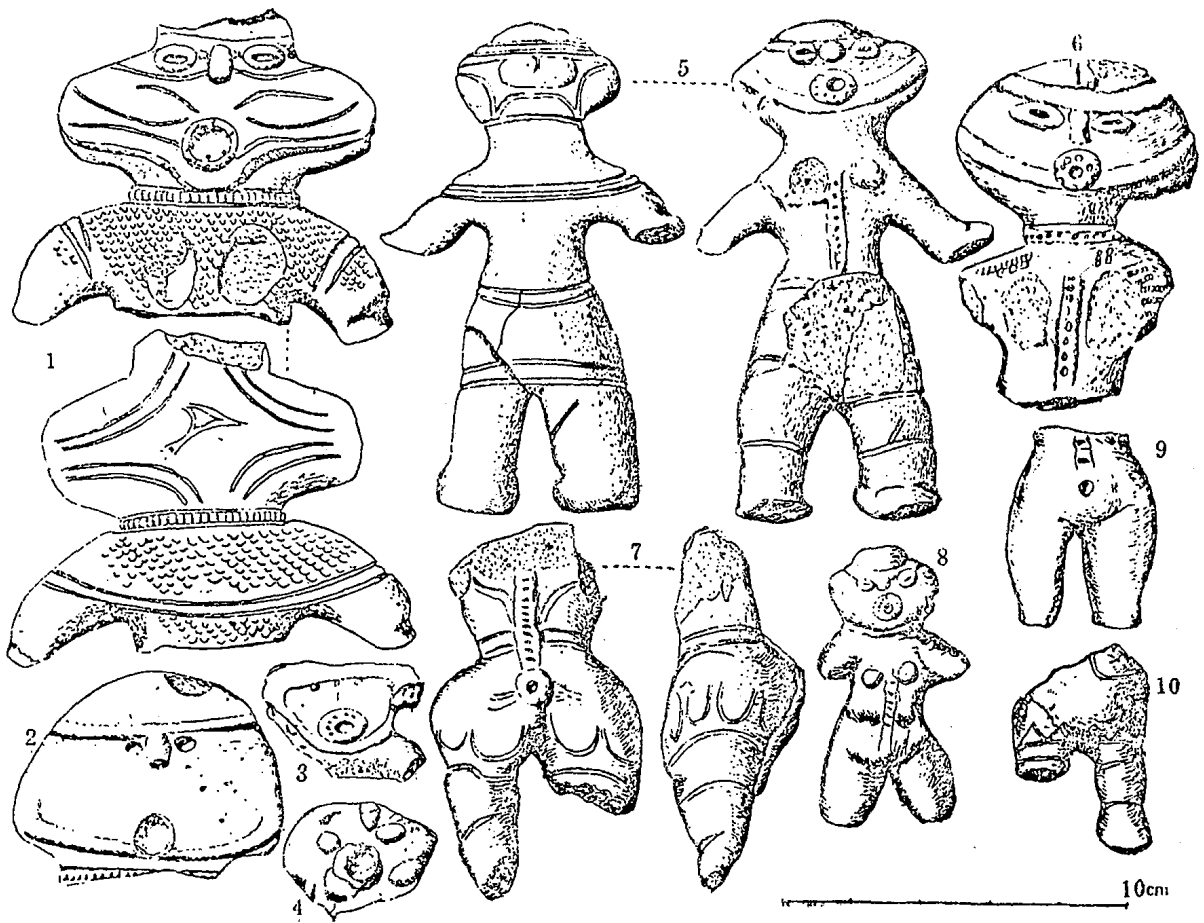
を基調に一部黒斑が見られるが、後面では全体が明赤褐色で下端が黒色化している。胎土には、細かな砂粒が認められ、雲母は見られない。焼成は良好である。

ちなみに、本土偶は三つの破片を接合したものであるが、報文写真には、そうした痕跡は認められない（池上一九四三）。戦災による破損の痕跡の可能性⁽⁵⁾がある。

椎塚貝塚出土資料（第十・十一・十二図）

椎塚貝塚は、茨城県稲敷市椎塚に位置する（第一図三）。小野川によって東西に分断された筑波・稲敷台地の東側の舌状台地に立地する。台地上から斜面にかけて大小五ヶ所の純鹹貝塚が存在する。標高は二五m前後を測る。古くから知られた貝塚で、明治二六（一八九三）年に坪井正五郎に発見されて以来幾度となく発掘され、その出土遺物は、現在、東京大学総合研究博物館や大阪市立博物館、関西大学、辰馬考古資料館などに所蔵されている。

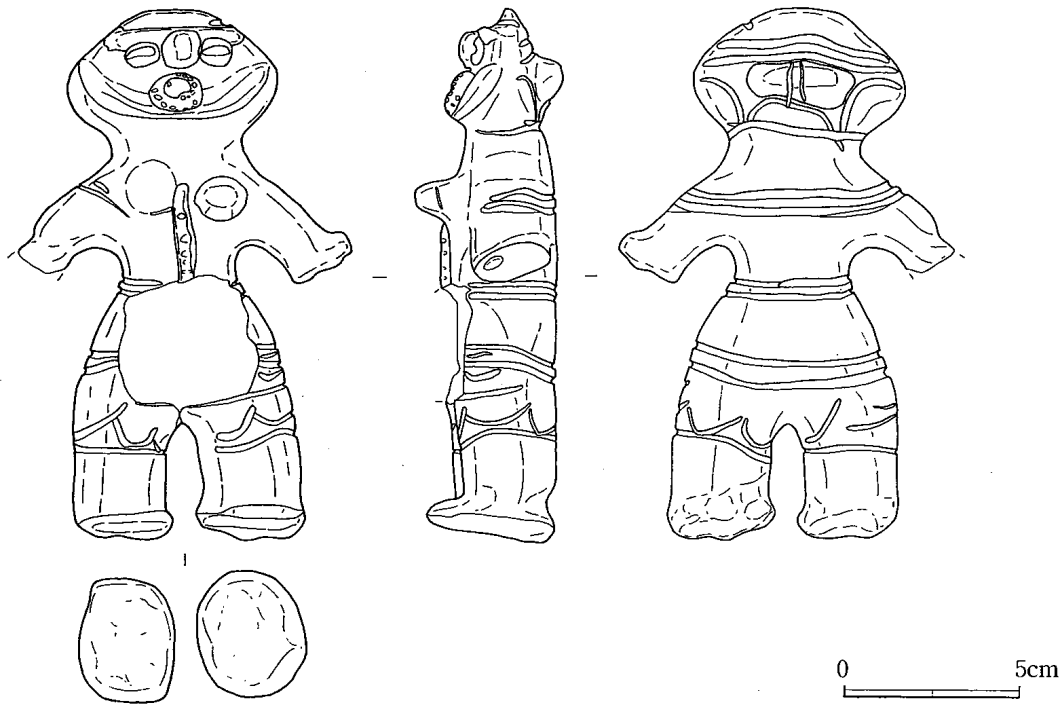
慶應義塾大学所蔵のものは、昭和二四（一九四九）年慶應義塾中等部考古会による発掘調査で出土したものである。調査の報告は、慶應義塾中等部考古会から発表されており、他にも慶應義塾中等部が刊行している『中等



第9図 椎塚貝塚出土土偶（慶應義塾中等部考古会1950）

部・一九五一』や『日本考古学年報』にその内容が記載されている（慶應義塾中等部考古会一九五〇、平野・西田一九五一、日本考古学協会一九五四）。それによると調査は、遺跡の東部の斜面に存在する貝塚を発掘し、土偶の他に、若干の前・中期土器と、概ね加曾利B式と思われる大量の土器、多数の骨角器、貝輪、耳飾、土器片錘、円板、スタンプ形土製品、ミニチュア土器、石鏃、石槍、石斧、石皿、砥石、凹石、敲石、成人男子の人骨、各種動物遺存体が出土した。土偶は、完形品一点、ほぼ完形のもの一点、頭部破片五点、胴部破片二点、胴く脚部破片三点、腕部五点、脚部四点、乳房部一点の計二二点出土した。報告書には、そのうちの十点の実測図が掲載されている（第九図）。うち、現在その所在が確認できたのは、今回紹介する五点のみである。もう一点の脚部破片（第十二図三）は、土器が詰め込まれていた木箱の中から筆者が発見したもので、当時は土偶として認識されていなかったものである。⁽⁶⁾

第十図は、腹部と右乳房を欠損するほかは、



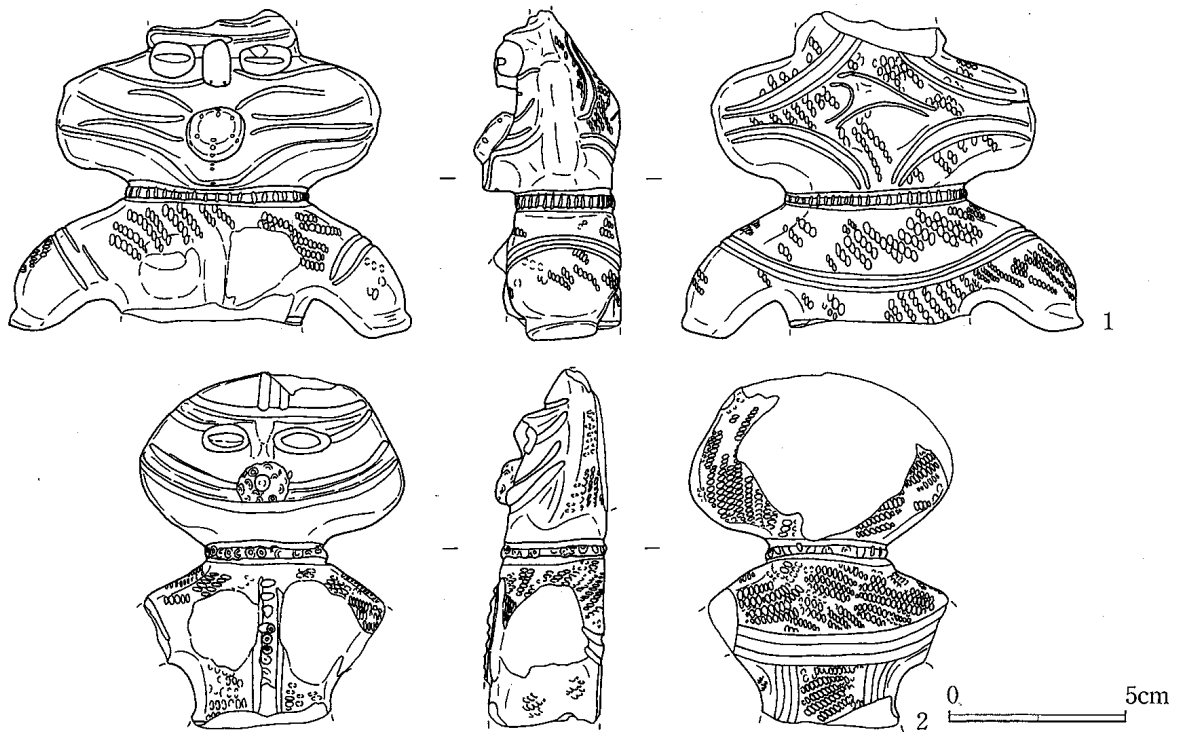
第10図 椎塚貝塚出土土偶 (1)

ほぼ完形の山形土偶である。高さ十五・〇cm、幅九・五cm、厚さ四・二cmを測る。頭部はやや丸い山形を呈し、眉状の隆帯にかかるように目、鼻の粘土粒が貼り付けられる。目の粘土粒には、横位の沈線が、鼻の粘土粒には下端に鼻孔状のくぼみが見られる。顎は粘土の貼り付けによる隆帯で表現される。隆帯上に粘土粒の口が貼り付けられる。口は中央がくぼみ口唇部は刺突で裝飾される。耳の表現はない。後頭部には粘土の貼り付けによる瘤状の隆起が認められる。胴部には、前方に突き出る乳房と、隆帯で表現された正中線が見られ、正中線の隆帯上には浅い刻みが施される。脚部は、下端に粘土を貼り付け、つま先と平坦な足裏を形作っている。かかとは粘土をつまみ出すように作出する。自立はするものの、全体が前のめりになり、安定感はない。文様は、沈線によるもので縄文は施されない。脚部の付根には弧線文が配される。粗いミガキが施され、色調は全体的に黒褐色から褐灰色を呈し、胎土には細かな砂粒が認められる。焼成は良好である。

第十一図一は、頭頂部、乳房、胴下半を欠損する山形土偶である。現状で、高さ九・三cm、幅十一・三cm、厚さ四・二cmを測る。頭部は凸形を呈し、顔面は眉状の横

位の隆帯にかかるとように目、鼻の粘土粒を貼り付け、目には横位の沈線を、鼻の下端には、一对の小さな刺突が施される。顎は粘土紐を貼り付けた隆帯で表現されている。口は顎の隆帯に接してボタン状の粘土を貼り付けたものである。中央は僅かにくぼみ、その周囲に小さな六つの刺突が施される。口の側面にも、この刺突と対応する六つの刺突が施され、さらに口の下方から顎にかけて、五個一列の刺突が付加される。後頭部は僅かに隆起する程度である。胴部には、乳房と正中線の剥離痕が認められる。顔部には扁平な弧線文が数本描かれ、その上からミガキが加えられる。後頭部は、RLの縄文を施した後二条一对の沈線による弧線文で菱形状のモチーフを描く。沈線間の縄文は磨消されているが、それほど丁寧なものではない。菱形モチーフ内には三又文状のモチーフを描いており、やはり沈線内は磨消されている。頸部には刻みを加えた二条の沈線が巡る。頸部以下は、全体にRLの縄文が施されているが、一部ナデ消されている箇所もある。前面左右の肩から後面にかけて二条の沈線が施され、沈線間は磨消される。胴部の欠損部分には、僅かに横位の沈線が認められる。色調は全体的に黒褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が含まれる。顔部には赤彩が

慶應義塾大学所蔵の土偶について



第11図 椎塚貝塚出土土偶 (2)

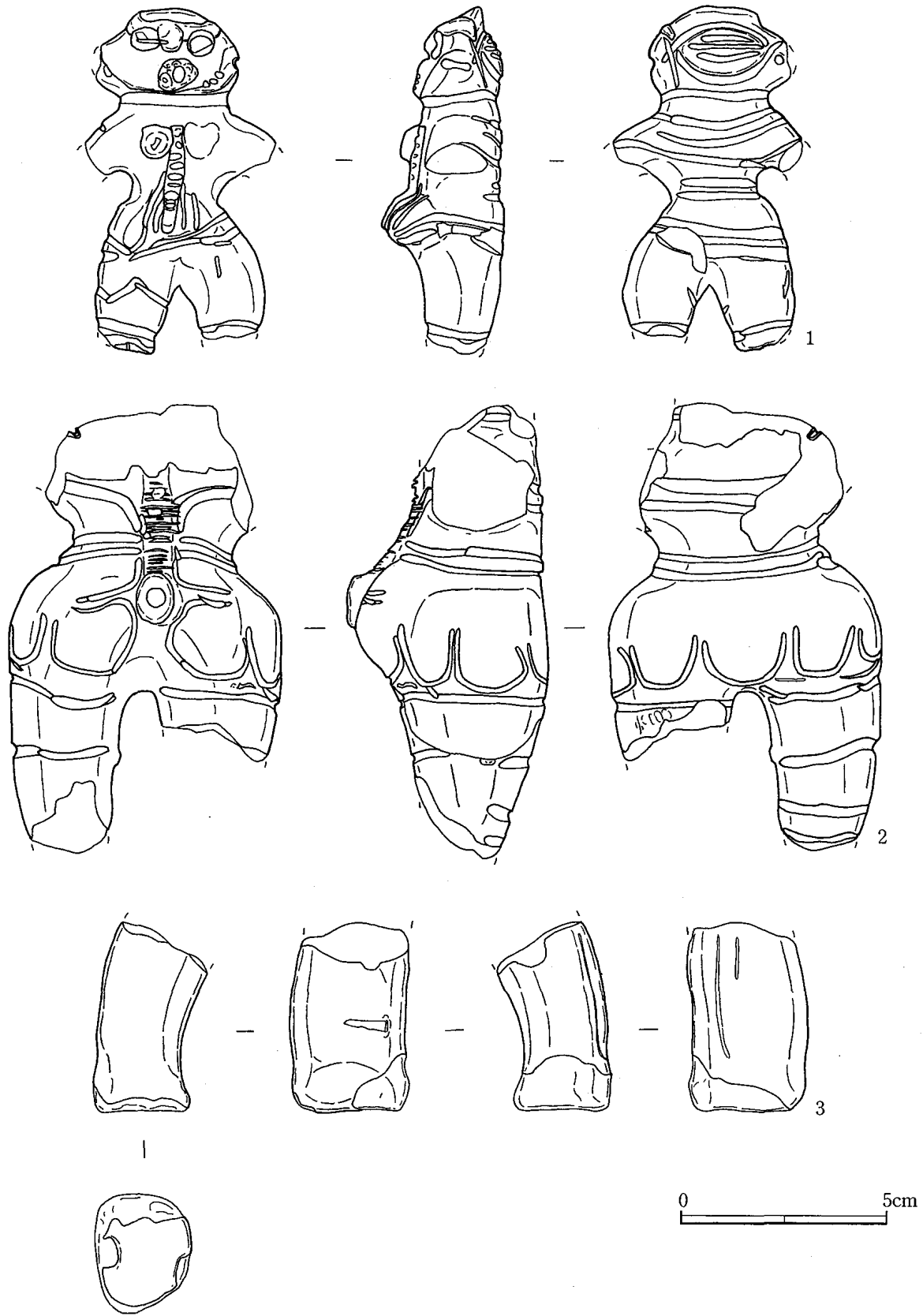
認められる。焼成は良好である。

第十一図二は、山形土偶の頭部、胴部上半の残欠である。現状で高さ十・一cm、幅七・五cm、厚さ三・二cmを測る。頭部は丸みをおびた山形。顔面は、眉と鼻を表現したT字状の隆帯を貼り付け、目は横位の沈線を加えた粘土粒で表現している。顎は横位の隆帯で表現され、隆帯上には円形の粘土粒による口が形成される。口の粘土粒には竹管状工具による刺突が加えられ、中央の刺突はやや深くて大きい。胴部には、乳房と、隆帯による正中線が表現される。正中線の隆帯には、上半は楕円形の刻みを、下半は竹管状工具による円形の刺突を加えている。顔面部は、眉、顎の隆帯を縁取るような沈線が施され、眉の隆帯の上部に、縦位の沈線が二条見られる。後頭部の残存部分は全体にRL縄文が施される。頸部には竹管状工具による刺突が加えられた二条の沈線が施されるが、刺突には、沈線に切られるものと、沈線を切るものがある。胴部は、前面、後面ともにRLの縄文が施される。前面には、正中線の隆帯を縁取る二条の沈線が施される。後面は、二条一組の縦位の沈線を二対施した後に、横位の沈線を二条施す。沈線間は縄文が磨消される。胴部くびれ部分にも、横位の沈線の痕跡が認められる。顔面部

はよくミガかれる。色調は全体に黒褐色で、顔面部は一部にぶい黄橙色を呈する。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

第十二図一は、腕部、左乳房、脚部の先端を欠損するほかは、ほぼ完形の小型の山形土偶である。現存で高さ八・四cm、幅四・六cm、厚さ三・〇cmを測る。顔面には、眉状の横位の隆帯が施され、目、鼻、口は粘土粒を貼り付けて表現する。目の粘土粒上には横位の沈線が加えられるが、右目の沈線は、鼻の粘土粒にまで達してしまっている。口の粘土粒には、中央に大きく深い刺突、口唇に竹管状工具による刺突が施される。顎は、粘土紐の貼り付けによって作出されているようであるが、顔面部に向かつて撫で付けられているため、明確な隆起とならない。頸部から耳孔付近にかけて明確な段差を形成し、それが顔の輪郭となる。顎の隆帯右側には小さく浅い刺突が三つ見られる。耳は貫通する孔で表現され、後頭部には瘤状の隆起が認められる。胴部には乳房、正中線、腹部の隆起があり、乳房上には僅かに縦長のくぼみが見られる。腹部は粘土の貼り付けにより隆起させ、正中線はその上に粘土紐を貼り付けて表現されている。正中線には円形の刺突と横位の刻みが施される。脚部の先端は

慶應義塾大学所蔵の土偶について



九五
(九五)

第12図 椎塚貝塚出土土偶 (3)

ともに欠損しているが、右足裏は僅かに残存する。文様は沈線を主体とし、腰部から腹部隆起の下にかけて二条の沈線がめぐる。腹部には、正中線の左右に二条の縦位の沈線が施される。右脚には、股側から側面にかけて乱雑な鋸歯状文が認められる。調整はナデと粗いミガキである。色調は、前面が明赤褐色を呈する他は概ね黒褐色である。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

第十二図二は、山形土偶の胴部と右脚部の残欠である。現状で高さ十・八cm、幅六・六cm、厚さ四・九cmを測る。後面は一部頸部が残存する。胴部中央でくびれ、腰部が大きく膨らむ。胴部には、隆帯で正中線が表現され、隆帯上には、鋭い先端の工具で多数の刻みを加える。正中線の下端には、縦長楕円形の突起がつき、中央部にやや深い円孔が穿たれる。腹部は、粘土を貼り付けて大きく隆起させている。文様は主に沈線で施され、僅かに残存する肩、頸部分にも沈線が見られる。腰部には、U字状の弧線文が配されるが、腹部の弧線文は、形の崩れたC字状となっている。右脚部には、横位の沈線が認められるが、股部分には施されず、下端のものは後面のみに描かれる。全体的に、沈線の太さが一定でなく、沈線を重ねている部分も認められる。また、後面の左脚部と横位

沈線の間には、縄文原体を押圧したとも思われる、小さな凹凸が確認できる。色調は全体的に黒褐色で、ナデによって調整される。胎土には細かな砂粒が認められ、焼成は良好である。

第十二図三は、中実の脚部破片である。現状で高さ四・五cm、幅二・七cm、厚さ二・九cmを測る。○脚状となるが、足裏は平坦で安定して立たせることができる。下端から足裏にかけて表面が摩滅しており、特に股側からみて右側の面の摩滅がはげしい。あるいは粘土が剥落した痕かもしれない。その場合、そこがつま先になっていた可能性があり、そちらが前面になる可能性がある。側面に縦方向の弱い筋が二条見られるが、これは調整時に砂粒が下から上に移動した際についたものと思われる。股側の面には横位に沈線状のくぼみが見られるが、これも文様ではない。全体に縦位のミガキが施され、単位がはっきりと確認できる箇所もある。色調は全体的に明黄褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が認められる。焼成は良好である。部分的に赤彩が見られる。

上高津貝塚出土資料（第十四図、第十五図一・二）

上高津貝塚は、茨城県土浦市上高津貝塚・柿久保、六

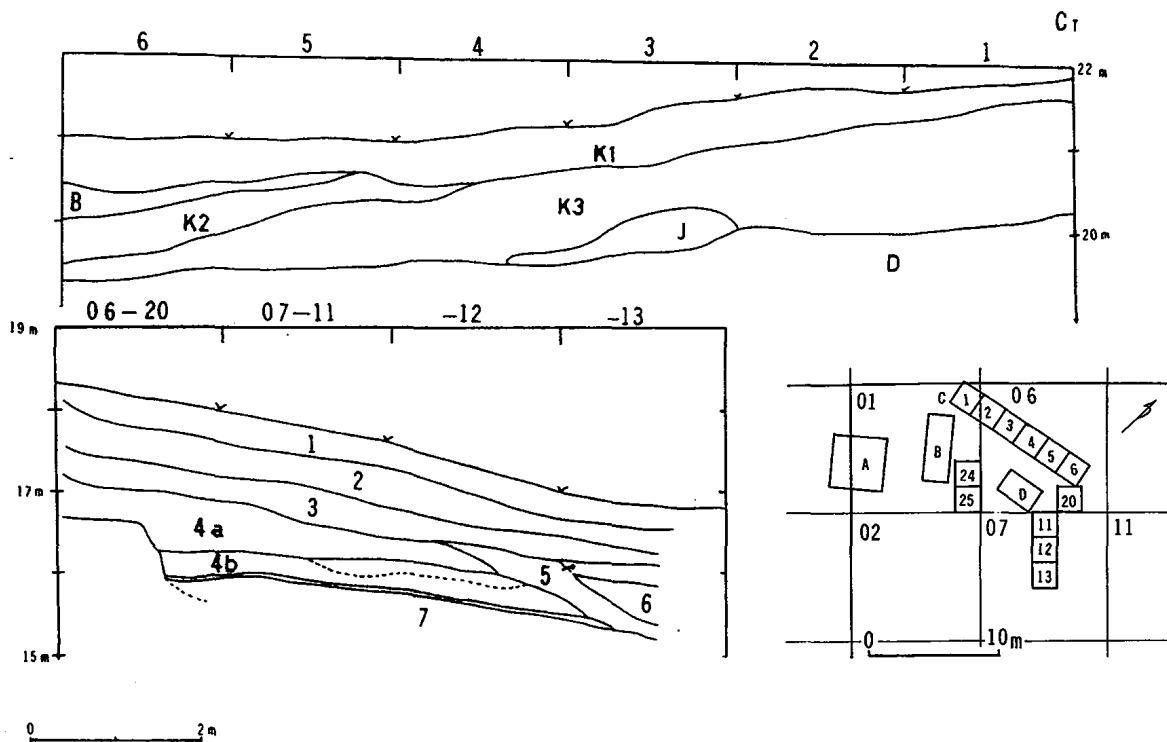
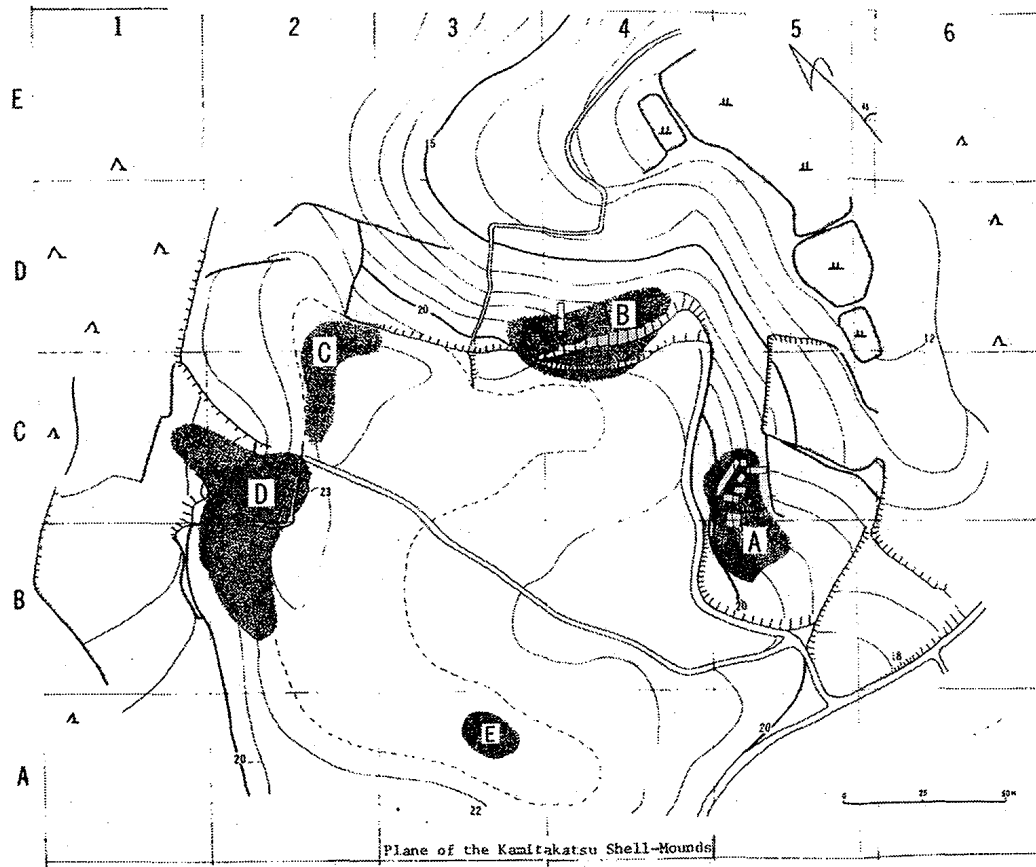
塚吉久保に位置する（第一四四）。霞ヶ浦西端に流入する桜川と花室川に画された、標高二二mを測る筑波・稲敷台地上に立地する、縄文時代中期から晩期にかけての貝塚である。上高津貝塚は、AからEの五つの地点が設定されており、大山史前学研究所、慶應義塾高等学校、慶應義塾大学、東京大学などによる調査が行われている。今回紹介する資料は、昭和二八（一九五三）年の慶應義塾高等学校考古学会による調査資料と、昭和四三〜四六（一九六八〜一九七二）年に行われた慶應義塾大学民族学・考古学研究室、同大学考古学研究会の調査資料である。

慶應義塾高等学校考古学会は、清水潤三氏指導のもと、後のA地点と呼ばれる台地東南部の斜面に位置する貝塚の一部を、二地点に分けて調査している。調査の内容は、慶應義塾高等学校考古学会により報告されている（慶應義塾高等学校考古学会一九五四）。出土遺物には、加曾利E式とされる中期土器、堀之内式、加曾利B式、曾谷式、安行1・2式とされる後期土器、石斧、石鏃、勾玉、凹石、敲石、砥石、石錘、骨角器、貝輪の他、各種動物遺存体がある。土偶は四点出土し、いずれも実測図が掲載されている。

慶應義塾大学所蔵の土偶について

慶應義塾大学民族学・考古学研究室、同大学考古学研究会による昭和四三・四四（一九六八・一九六九）年の調査に関しては、慶應義塾大学考古学研究会から略報が出されている（慶應義塾大学考古学研究会一九七〇）。それによると、調査は、A地点を対象に、いくつかのトレンチを設定して行われている（第十三四）。報文には、各トレンチの層位ごとの観察状況が記載され、出土遺物には、堀之内式、加曾利B式、曾谷式、安行1、2、3 a式、姥山II式の各土器、製塩土器、石斧、石鏃などの石器、耳飾、土錘などの土製品、骨角器、貝製品などがある。また、調査では、ブロックサンプリング法を採用し、貝層の水洗選別を行っている。その結果は、小宮孟氏による一連の研究で示されている（小宮一九七〇、一九八〇、小宮・鈴木一九七七）。土偶については、一点出土とあるが、筆者の整理作業によって、もう一点出土していることが判明した。これは昭和四四（一九六九）年に出土したもので、当時は土偶として認識されていなかったものと思われる。

第十四図は、慶應義塾高等学校考古学会調査資料である。一は、右腕部、両脚部を欠損する山形土偶である。現



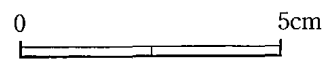
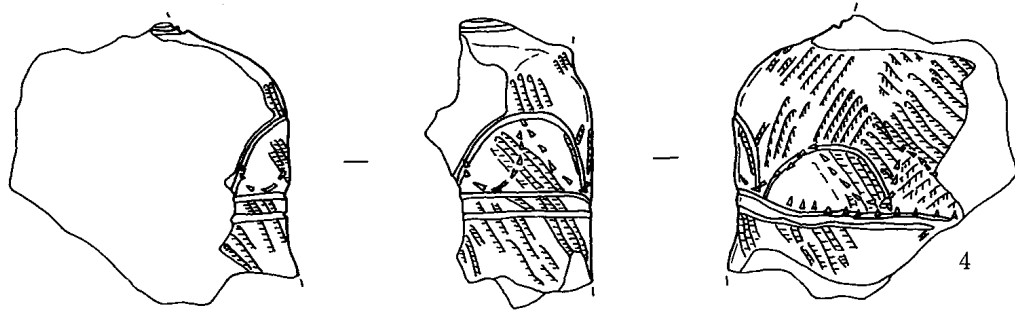
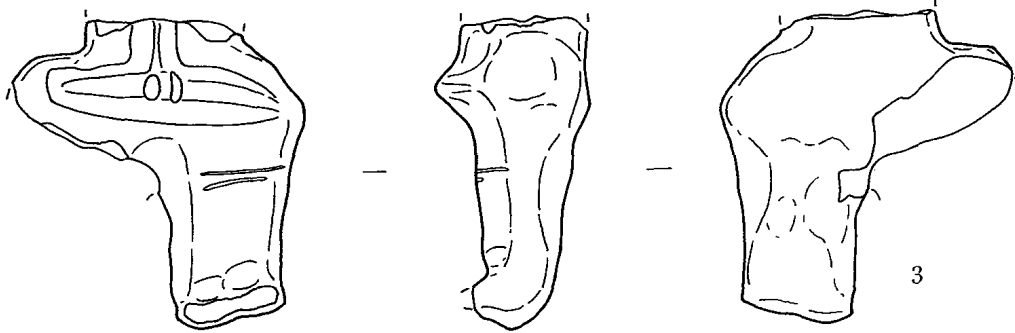
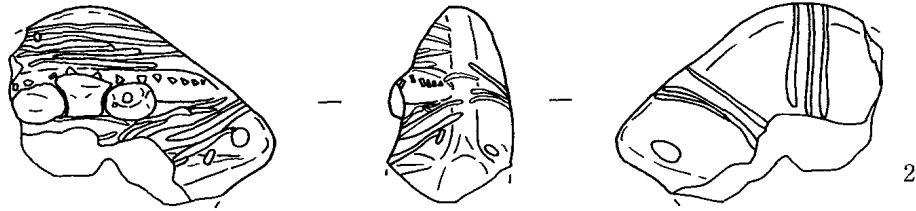
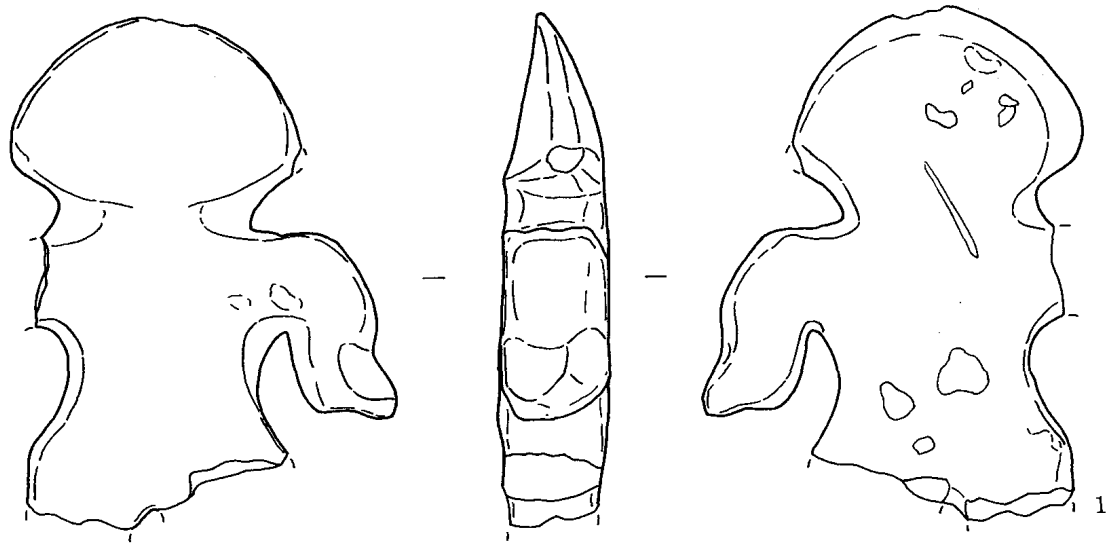
第13図 上高津貝塚地形図・トレンチ断面図 (慶應義塾大学考古学研究会1970)

状で高さ九・七cm、幅七・三cm、厚さ二・二cmを測る。顔面や乳房などの表現がまったく見られないが、片面に顎を表現したと思われる陵が形成されていることから、こちらを前面とした。頭部は丸みを帯びた山形を呈し、前方に向かって頭頂部がやや湾曲しており、後頭部にあたる部分は若干丸みを帯びる。腕先は粘土をつまみ、くぼみを作ること、先端を外に反らせている。胴部はくびれ、腰部が外に張り出す。後面は、前面に比べやや凹凸があり、小さく薄い粘土の小片が貼り付いている部分がある。後面の頸部分には斜位の浅い沈線状のくぼみが見られるが文様ではない。全体にナデによって調整され、色調は橙色と黒褐色が混じるが、後面では黒褐色が基調となる。胎土には細かな砂粒が見られる。焼成は良好である。僅かに赤彩が残存する。

第十四図二は、山形土偶の頭部破片である。現状で高さ三・八cm、幅五・二cm、厚さ二・五cmを測る。前面が明赤褐色を呈し、破断面部分も同様の色調であることから、破損後に火を受けたか、火を受けた結果破裂したものであると思われる。後面は橙色である。頭部は山形を呈し、顔面部分には、眉状の横位の隆帯を貼り付け、目、鼻を粘土粒の貼り付けで表現する。左目には浅い小さな刺突

が施される。眉状の隆帯上には、目、鼻の粘土粒を貼り付けた後に、角ばった棒状工具で小さな刺突列を施す。僅かに残存する左顎部分は若干隆起し、楕円形の浅い刺突が施される。耳は円形の貫通孔で表現される。顔面部分には多数の浅い沈線が施され、眉の上では横位、頬では斜位となる。後頭部には、中央に縦位に三条、左部分に斜位に二条から三条の浅い沈線が施される。胎土には粗い砂粒が含まれ、焼成は強い火の影響が若干もろい。

第十四図三は、右脚部と左脚部のつま先部分を欠損する山形土偶の胴下半の残欠である。現状で高さ六・〇cm、幅五・六cm、厚さ二・九cmを測る。腰部が外に張り出し、左脚部下端は突出し、つま先を形成している。つま先の上面に小さなくぼみが二つあり、粘土をつまみあげてつま先を作出したことがわかる。胴部には、粘土を貼り付けて表現した正中線が見られ、腹部の隆帯と連結する。腹部の隆帯は、粘土の貼り付けによるもので、断面三角形となる。正中線と腹部の隆帯の連結部分には縦長の刺突が一对加えられる。左脚の付根には、浅く細い二条の筋が確認できる。色調は橙色を基調として一部黒褐色が混じる。全体がナデによって調整され、胎土には細かな砂粒が認められる。焼成は良好である。わずかに赤彩が



一〇〇(一〇〇)

第14图 上高津貝塚出土土偶

認められる。

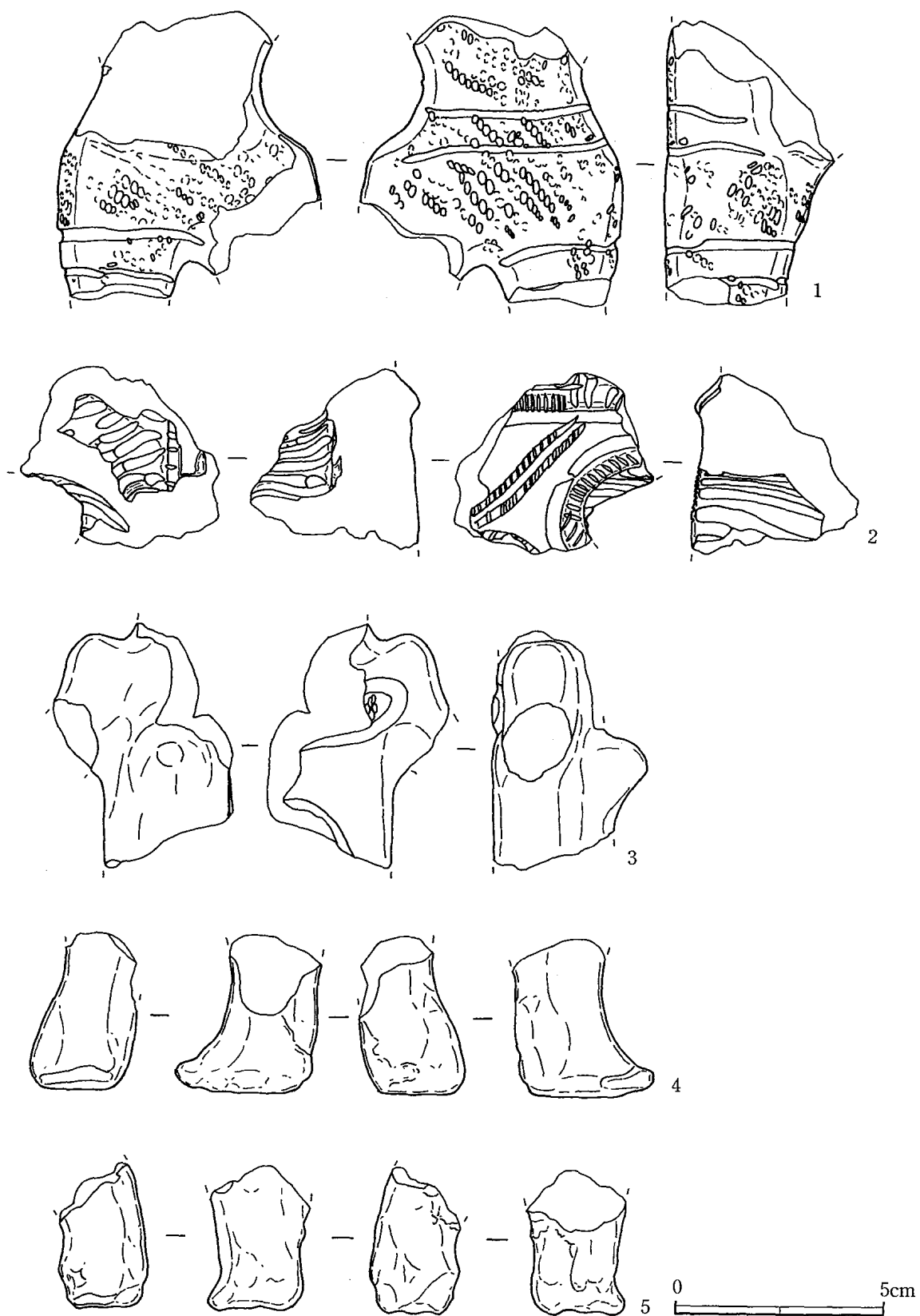
第十四図四は、山形土偶の腰部破片である。前面は大きく欠損している。現状で高さ五・四cm、幅五・五cm、厚さ三・二cmを測る。破断面の観察から少なくとも二つの粘土の塊を結合し、さらにその上に厚さ四mmほどの粘土を覆って成形していることがわかる。全体に無節しの縄文が施され、その後に沈線、刺突を施している。沈線は胴部のくびれ部分にも二条認められる。腰部下半には二条の沈線を横位に施し、その上部に弧状のモチーフを加える。さらに、一部沈線に重なるように、棒状工具による横位、鋸歯状の刺突列を施している。色調は黒褐色で、胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

慶應義塾大学民族学・考古学研究室、同大学考古学研究会調査資料は第十五図一・二である。

一は、山形土偶の胴部破片である。胴上半と腹部を欠損する。現状で高さ六・九cm、幅六・三cm、厚さ四・一cmを測る。胴部がくびれ、腰部が外に張り出すが、左右対称ではない。前面では、僅かに腹部の突出が認められ、本来は腹部が隆起していたことが分かる。後面のくびれ部と、脚の付根部分に太い沈線を二条ずつ描き、その後R Lの縄文を施している。縄文によって沈線がなでつ

けられ、細くなっているところがある。縄文は原体が多少ほつれているような状態であったと考えられる。また原体を同じ箇所回数回転がしている箇所もある。色調は暗赤色と黒褐色が混じる。くびれ部分はナデによって成形されている。胎土には細かな砂粒をふくみ、焼成は良好である。

第十五図二は、みみずく土偶胴部右半の破片である。現状で高さ四・三cm、幅四・八cm、厚さ四・〇cmを測る。前面は、腕から腹部に向かって伸びる大きく突き出た隆帯が残存部の大半を占めるが、隆帯の先端は欠損している。沈線で縁取られた正中線がわずかに残存しており、沈線上に小さな楕円状の刺突が加えられる。隆帯から正中線、側面にかけて太い沈線が間隔を空けずに施される。後面は、胴部のくびれ部分に、体の輪郭に沿って沈線が施され、その外側の若干隆起した部分に鋭い横長の刻みが加えられる。後面上方には、沈線で縁取りされ僅かに隆起する横位の隆帯が認められる。この隆帯上端を区画する沈線は、隆帯上の縦位の短い沈線を切って施される。隆帯上には縦長の鋭い刻みが加えられ、隆帯下端を区画する沈線を切っている。後面中央部分には深い二条の沈線が斜位に施され、その中にも縦長の刻みが加えられる。



第15图 上高津貝塚 (1・2) 鬼越貝塚 (3~5) 出土土偶

その下方にも同様の文様が弧状に認められる。色調は黒褐色で、後面無文部分はミガキで調整される。胎土には細かな砂粒が見られ、焼成は良好である。僅かではあるが赤彩が確認できる。

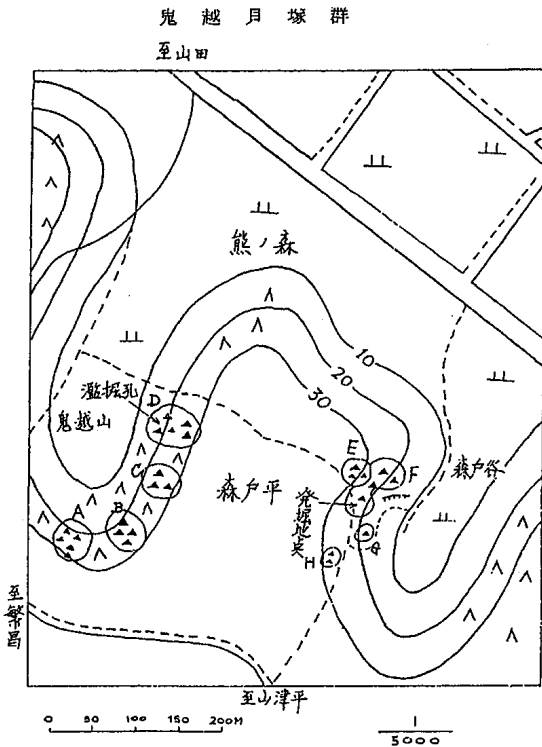
これら二例の土偶にはラベルが付されており、出土位置と層位が判明している。第十五図一は、一九六八年調査の際、A区Cトレンチ6区、KI層から出土したものである。KI層は表土下三〇cmの深さまで確認できる貝を含む茶色土で形成され、攪乱の多い層である。第十五図二は、一九六九年調査の際、A区C5グリッド07区11トレンチ、4層下集積から出土したというラベルがある。4層は上部の4a層、下部の4b層に分層されており、4a層はヤマトシジミを含む黒色土で、4b層は貝を大量に含む茶色土である。4a、4b層とも安行2、3a式土器、製塩土器が出土している(第十三図)。

鬼越貝塚(森戸貝塚) 出土資料(第十五図三〜五)

鬼越貝塚は、霞ヶ浦(北浦)西部の茨城県行方市繁昌に位置し、北浦の西部に広がる行方台地のなか、山田川南部の標高三〇m前後の舌状台地とその斜面に立地する(第一図五)。昭和二九(一九五四)年に清水潤三氏、竹

慶應義塾大学所蔵の土偶について

下治作氏指導のもと、慶應義塾高等学校考古学会によって調査されており、同会によって報告がなされている(慶應義塾高等学校考古学会一九五五)。それによれば、北に向かって突出した台地の西側斜面と東側斜面に、それぞれ四つの貝塚が存在し、西側斜面は字鬼越、東側斜面は字森戸に位置するが、これらを総称して鬼越貝塚(森戸貝塚)としている。調査は、東側斜面部に位置するF貝塚と名付けられた地点の一部を対象に行われた(第十六図)。堀之内式、加曾利B1、B2、B3式、曾谷式、安行1式の後期土器、土錘、円板、スタンプ形土

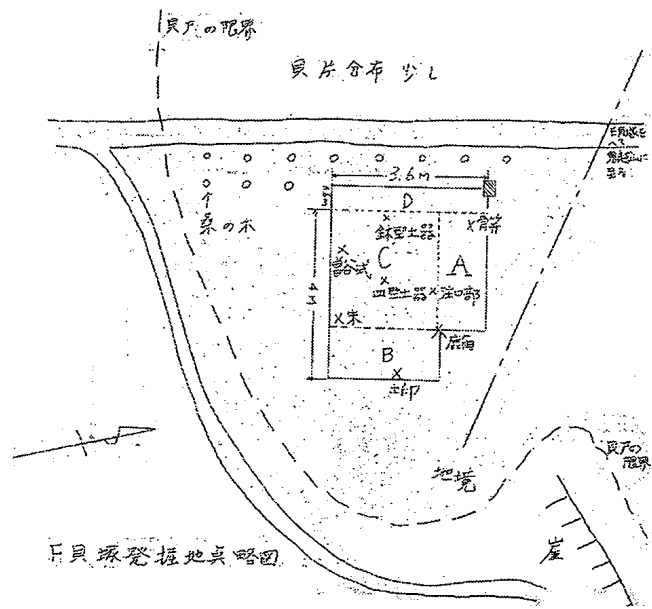


第16図 鬼越貝塚地形図
(慶應義塾高等学校考古学会1955)

製品、石棒状土製品、敲石、軽石製石製品、骨角器、貝輪、ムクロジの炭化種子、各種動物遺存体などが出土している。

報告によれば、土偶は、Bトレンチの中央部、下部混土層の上部より発見された(第十七図)。脚部一個、胸部二個(内一個は乳房部)が出土し、脚部一個と乳房部一個の実測図が掲載されている。このうち、胸部の二個は、現在では接合し一個体となっている。また一九五五年の報告では触れられていないが、当時発掘された土製品の中に土偶の脚部と思われる破片が一個体存在し、これは『茨城県史料Ⅱ考古資料編 先土器・縄文時代』中の写真図版に掲載されている(茨城県一九七九、二八二頁下から四段目、左から三つ目の土製品)。これを合わせると、鬼越貝塚出土土偶は、脚部二点、胸部一点の計三点となる。⁽⁷⁾

第十五図三は、胸部右半分の破片である。現状で高さ五・七cm、幅四・三cm、厚さ三・七cmを測る。肩がやや上方に張り出し、乳房が大きく前方に突出する。前面の胸部中央には、縦位の沈線が僅かに認められ、正中線の表現かと思われる。後面には、沈線によって曲線が描かれ、その内側にLRの縄文が施される。後面下方の欠損



第17図 鬼越貝塚トレンチ配置図
(慶應義塾高等学校考古学会1955)

部分にも僅かに曲線が認められる。色調は黒褐色で、全体にミガキが施されている。胎土には細かな砂粒が認められ、焼成は良好である。赤彩がよく残存している。

第十五図四は、中実の右脚破片である。現状で高さ三・七cm、幅二・五cm、厚さ三・四cmを測る。前面から向かって左側の面の下方がやや瘤上に隆起している。つま先が突出し、足裏はやや凹凸を持つが平坦である。立たせると、若干股側に傾く。足裏を除きミガキが施されるが、後面の股側部分はやや成形が粗い。色調は黒褐色

で、左側の隆起箇所は橙色を呈する。胎土には細かな砂粒を含み、焼成は良好である。

第十五図五は、中実の左脚部破片である。現状で高さ三・五cm、幅二・一cm、厚さ二・四cmを測る。つま先をもち、足裏は凹凸があるが、立たせることができる。全体にナデによる調整がなされるが、股側部分は粗い。色調は黒褐色を基調とし、部分的に褐灰色を呈する。胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

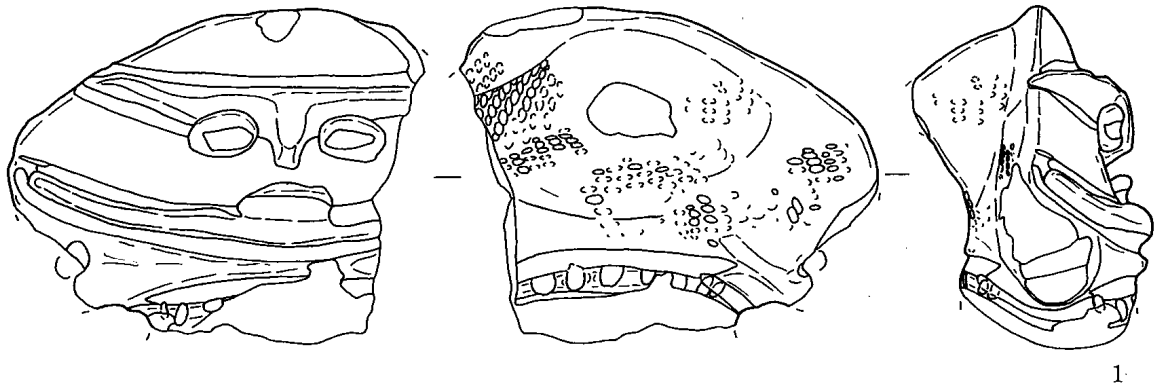
立木貝塚出土資料（第十八・十九図）

立木貝塚は、茨城県北相馬郡利根町立木に位置する（第一図六）。利根川北岸には東西に伸びる北相馬台地が存在し、立木貝塚は北相馬台地の東端部、台地面よりも一段低い砂丘状の平坦地に立地する。標高は十m前後で、平坦面から斜面にかけて貝塚が弧状につながって存在する。古くから多くの小発掘が行われ、多数の遺物が出土しており、特に土偶の出土数は百点を超えると言われている。しかし、正式に公表されていないものが多く、確実な点数は明らかではない。報告がなされたものとしては、昭和三七（一九六二）年、三九（一九六四）年に行われた明治大学の調査が知られている（杉原・戸沢一九

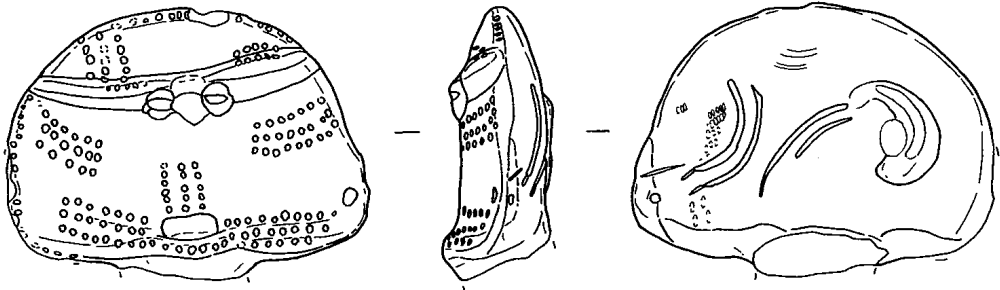
六五）。

慶應義塾大学では、立木貝塚出土の土偶を四点所蔵する。第十八図二は、江坂輝彌氏の『土偶』において、刺青を思わせる土偶として図が掲載されており（江坂一九六〇、三〇五頁）、その後一九六四年発行の『日本原始美術2 土偶・装身具』に写真図版で掲載されている（甲野一九六四）。また、第十八図一は、サントリー美術館の展示図録『土偶と土面』に写真で掲載されている（サントリー美術館一九六九）。管見の限りでは、この二点の土偶に関しては、これらが初出文献であると思われる。

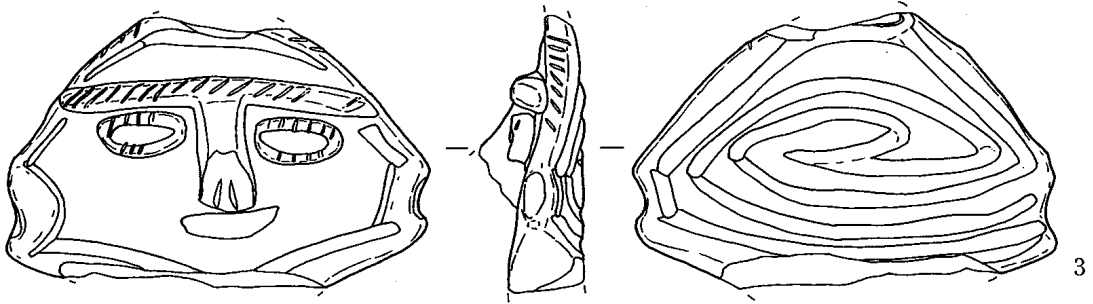
第十八図一は、山形土偶の頭部破片である。現状で高さ六・四cm、幅八・〇cm、厚さ四・六cmを測る。顔面には、眉と鼻を表現したT字状の隆帯が貼り付けられ、目は横位の沈線を施した粘土粒で表現される。口も同様にやや太い沈線を施した粘土粒で表現され、その下には顎を表現した横位の隆帯が貼り付けられる。後頭部は著しく隆起するが、先端を欠損する。耳は貫通する円孔で表現され、耳孔の半分から先を欠損する。眉と顎の隆帯の上下には、それぞれ隆帯を縁取る沈線が施される。頸部には楕円形の刺突を施した後に横位の沈線を描く。後頭部には、LRの縄文が施されるが、上部はミガキによつ



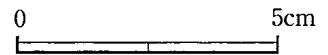
1



2



3



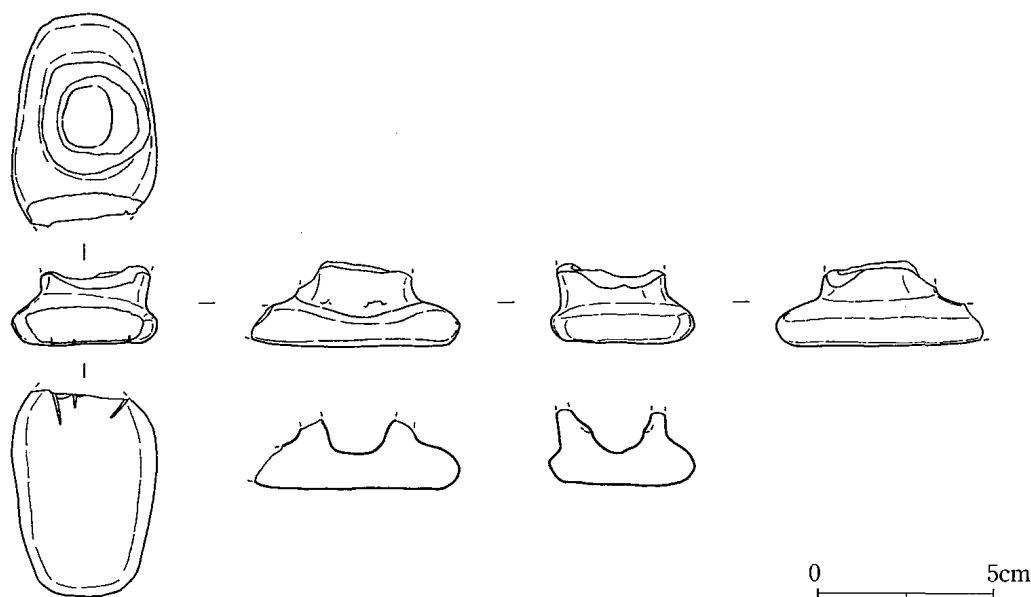
第18图 立木貝塚出土土偶 (1)

て磨消されている。顔面はミガキが施され、赤彩がよく残存している。色調は黒褐色で、胎土には細かな砂粒を含む。

第十八図二は、山形土偶の頭部破片である。現状で高さ五・二cm、幅六・九cm、厚さ二・二cmを測る。扁平な扇形を呈する。顔面は、眉状の細い隆帯を貼り付け、中央に小さな粘土粒を密集させて目と鼻を表現している。目の粘土粒上には横位の沈線が加えられる。鼻は下端を欠損する。口は楕円形のやや深くぼみで表現される。顔の下端、特に中央部が若干前方に隆起し、顎を形成している。耳は貫通する円孔で表現されるが、この部分は粘土を貼り付けて、顔の輪郭をやや外に広げている。右耳にあたる部分は欠損しており、左耳と同様な方法で耳を表現していたのか判然としない。頸は破断面の最大長が二・六cm程しかない。後頭部には、右側に逆C字状の粘土が貼り付けられており、その内側にも小さく薄い粘土が付されている。顔面部は小さな円形の刺突が複数列施され、後頭部には、浅く細い二条の沈線で、弧線文を描いている。二対の弧線文の上部には、同様の沈線の痕跡が確認でき、本来は、三対の弧線文が向かい合っていたものと思われる。また、後頭部左側には、単節の縄文

がわずかに認められる。後頭部は摩滅している箇所が多く、縄文が全体に施されていたかは明らかでない。顔面部分はミガキにより調整される。色調は灰黄色を基調とし一部黒褐色を呈し、胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

第十八図三は、頭頂部、鼻の先端を欠損する頭部の破片である。現状で高さ五・二cm、幅八・一cm、厚さ二・〇cmを測る。非常に扁平で、鼻や目など顔面部の隆帯を除いた厚さは、最大で一・三cm程しかない。概ね三角形を呈するが、左右の端部がくぼんでおり、耳を表現したのものとも思われる。全体的に、若干前方に湾曲しており、後頭部は丸みを持っている。顔面は、眉状の隆帯と鼻の隆帯が連結しT字状になり、鼻は前方に突出する。鼻の下端には、縦長の刻みが確認でき、鼻孔を表現したものであると思われる。眉の隆帯上には斜位の刻みが施される。目は粘土粒を貼り付け、横位の沈線を施した後に縦長の刻みを加えている。口は沈線で表現される。顔の輪郭に沿うように沈線が施され、側面には眉や目と同様の刻みが見られる。後面には、渦巻き状の文様が沈線で描かれる。二本の沈線が中央で連結した、入り組み状のモチーフである。色調は、前面がにぶい黄橙色に褐灰色の黒斑が見



第19図 立木貝塚出土土偶 (2)

られ、後面は橙色を呈する。全体にナデによる調整が成され、胎土には細かな砂粒を含む。焼成は良好である。後面には、わずかに赤彩が認められる。

第十九図は、つま先部分を欠損する脚部下端の資料である。現存で高さ二・三cm、幅四・一cm、厚さ五・九cmを測り、地面に接着する足部分は中空で、脚部分は中空となる。足裏は、前方がやや広がり、安定して立たせることができる。立たせると、右側にやや傾くことから、右脚の可能性がある。つま先には三本の鋭い沈線が見られ、指を表現したものと思われる。中空部分の脚の内面には、輪積みの段が認められる。足裏面にはケズリの痕跡が認められるが、全体に粗いミガキで調整されている。色調はにぶい黄褐色で、足裏は一部褐灰色を呈する。胎土には細かな砂粒を含み、焼成は良好である。

土偶の時期と若干の考察

ここでは上記の観察所見をもとに各土偶の時期と若干の問題を指摘したい。

縄文時代中期

縄文時代中期に位置づけられるのは、宮平貝塚出土土資

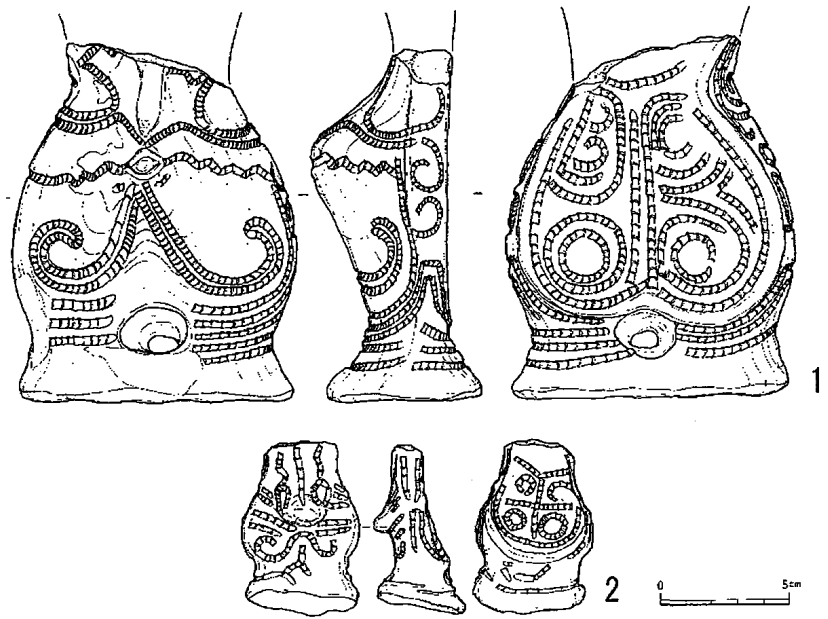
料の二点と佐倉貝塚（南平貝塚）の土偶である。これらは、古くからその存在が知られ、阿玉台式土器に伴うものとして注目されてきた。阿玉台式期の土偶については、これまでいくつか論じられており（齊藤・磯前一九八七、石坂一九九六、池田・瓦吹一九九六、原田一九九六、池田一九九八）、今回紹介した土偶も取り上げられているので参考にしたい。

第四図は、曲線的な角押文を有している点で、阿玉台式初期のものより後出的であり、角押文の幅が比較的狭いこと、胸部に見られる弧線文や側面の文様が二列で描かれていることを考慮すると阿玉台Ⅱ式期の所産であろう。第五図は、角押文の幅が狭いこと、下面には明確に二列の楕円文が見られることから阿玉台Ⅱ式期に位置づけられる。第八図は、曲線的な文様を有し、角押文の幅が狭く、側面に見られる文様が二列で描かれていることから同じく阿玉台Ⅱ式期に位置づけられる。

阿玉台式期の土偶については、先に上げた諸研究により、阿玉台Ⅰ式からⅡ式期を中心とする時期に存在し、東関東地方に分布が集中することが指摘されている。また、茨城県的那珂川以北と以南とは地域差があることも言及されている。しかし、これらの土偶の系譜につい

ては、問題の多いところである。該期の土偶については、東北地方の大木式土偶との関係、特に福島県内にみられる角押文を有する土偶群との類似が指摘されている（永峯一九七七、石坂一九九六、原田一九九六、池田一九九八）。今回紹介した該期の土偶についてもそれらと共通する特徴をもっており、ここではそうした土偶群が多く出土している福島県七郎内C遺跡（財団法人福島県文化センター一九八二）、法正尻遺跡（財団法人福島県文化センター一九九二）の資料を取り上げ、宮平貝塚、佐倉貝塚例（第五・八図）と若干の比較を試みたい。⁸⁾

まず両者の共通点を挙げると、石坂茂氏も指摘するように、七郎内C遺跡出土土偶（第二〇図一）が持つ、臀部の左右に配される円文とそれを中央で画する縦位二列のモチーフ、臀部下端で左右を連結する角押文は佐倉貝塚出土土偶（第八図）と酷似し、腹部突出部から左右に垂下するモチーフは、宮平貝塚例（第五図）や佐倉貝塚例（第八図）の前面突起部から左右に垂下するモチーフと類似していると指摘できなくはない。また、七郎内C遺跡からは、腹部が隆起せず突起状になる土偶も出土している（第二〇図二）。こうした土偶は、山形県内陸部や宮城県南部に分布するいわゆる西ノ前タイプの土偶と



第20図 七郎内C遺跡出土土偶 (財団法人福島県文化センター1982)

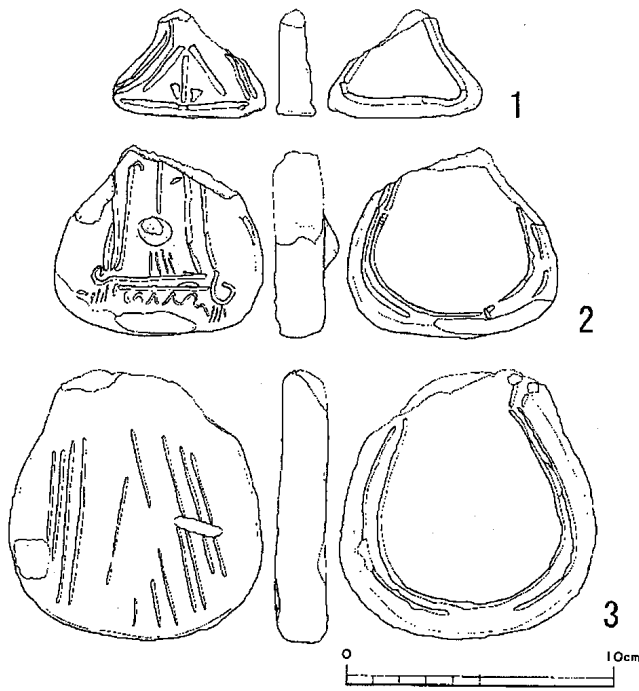
は異なり、短脚で尻が垂れ下がり後方へ突出しない形態を有し(阿部一九九六、一九九八)、宮平貝塚例や佐倉貝塚例との類似が指摘できる。また、法正尻遺跡からは、脚部が表現されない扁平で板状の土偶も出土しており(第二二図)、その内の一点は小型ながら宮平貝塚例や佐倉貝塚例と形態が酷似する(第二二図一)。また脚部の

表現が無いものには、腹部に突起を有する例も存在する(第二二図二)。

次に相違点を挙げると、宮平貝塚、佐倉貝塚例と文様が類似する土偶は、脚部が作出されており、これらの足裏面は、大きく平らで文様が施されることがなく、粘土の繋ぎ目が見られるなどややあらい調整で、基本的に立たせることを目的として作られたと考えられる。一方、宮平貝塚例(第五図)は下面に文様を有し、佐倉貝塚例(第八図)は文様を有していないが、比較的丁寧なミガキ調整が見られ、立たせると安定しない点も異なる。さらに法正尻遺跡の脚部が無い土偶(第二二図)は、小型のもの(第二二図一)を除いて著しく扁平で文様も異なっている。

このように、両者の間には共通点と相違点が存在するが、文様モチーフ、腹部に突起を有する特徴、法正尻遺跡の脚部が無い小型の土偶の形態、同遺跡の立たせることを目的としていない土偶など、それぞれの属性には共通している点が多く、こうした属性の組み合わせによって宮平貝塚、佐倉貝塚例のような土偶は成立し得ると考える。また、七郎内C遺跡のような土偶(第二〇図)は、胴部と脚部を別々の粘土塊をつなぎ合わせて形作ってい

ることが多く、粘土塊の接着には木芯を用いているものもある。こうした土偶は、脚部の粘土塊を接合しない状態では、宮平貝塚や佐倉貝塚例と形態が類似しており、製作技法の上からも脚部が欠落することは十分考えられる。こうしたことから、やはり、阿玉台式期の土偶の系譜に関しては福島県を中心とした東北地方南部の大木式土偶との関係を考慮すべきであると思われる。だが、そのためには両者の編年の位置を定める必要があるし、中間地域である茨城県北部で類例が乏しいことも考える必



第21図 法正尻遺跡出土土偶
(財団法人福島県文化センター1991)

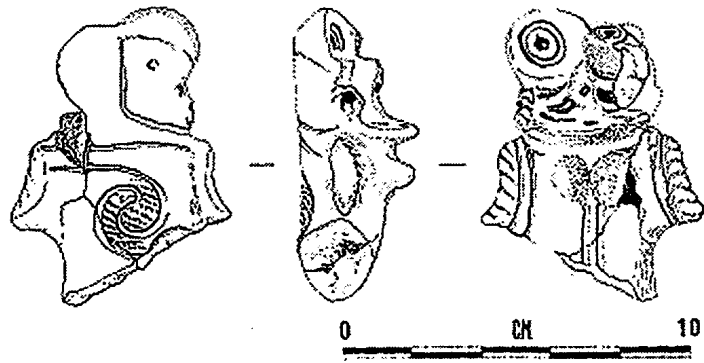
要がある。さらには、七郎内C遺跡、法正尻遺跡例のような短脚・垂尻の土偶については、新潟県や北陸地方、長野県などにも同形態のものが存在し、これらの土偶にその系譜が辿れる可能性が指摘されていることから(山内一九九四、阿部一九九六、一九九八)、阿玉台式期の土偶にあってもそうした地域を視野にいれて再検討する必要がある。

縄文時代後期

関東地方における縄文時代後期の土偶は、ハート形土偶、筒形土偶、山形土偶、みみずく土偶などが知られている。

椎塚貝塚出土の第十二図三は、その形態と、足裏面が平坦で安定して立たせることができることからハート形土偶であろう。ハート形土偶は、堀之内1・2式期を通じて作られ、わずかに加曾利B1式期まで残存することが知られている(上野一九九一)。本例は脚部破片であるため、詳細な時期は不明である。

鬼越貝塚(森戸貝塚)出土の第十五図三は、胴部の小破片であるため時期の判別は困難であるが、神奈川県上吉沢遺跡(内ムクリB遺跡)に共通の特徴を有する土偶が存在する(第二二図)(江坂ほか一九六四、平塚市一



第22図 上吉沢遺跡出土土偶 (江坂ほか1964)

九九九)。鬼越貝塚例の前方に大きく突き出す乳房や、わずかに残る沈線

による正中線の表現、背面の曲線的な沈線と内側の縄文、ミガキ調整が顕著な点がそれで、特にミガキ調整が類似する。ただし、肩がやや上に張り出す形態は異なる。上吉沢例は、頭頂部の突起、背面の入組文から加曾利B1式からB2式前半段階と考えられ、鬼越貝塚

八九・一九九一)、今回紹介した資料をあつかった論考もある。

まずは椎塚貝塚出土資料からみていく。第十図は、沈線によって文様が描出され、上野氏の提唱する椎塚系列にあたる。上野氏は、本例を頭部が楕円形であること、縮約された後頭部突起、小形化した乳房、弧線文の規格性の喪失から、曾谷式期に位置づけている。第十一図一は、後頭部や肩部に磨消縄文が施され、上野氏の提唱する福田系列にあたる。上野氏は、本例を肩部に幅の狭い磨消横帯文が見られることや、後頭部の文様を土器文様と対比させ、曾谷式の段階に位置づけている(上野一九九一)。本例の頸部に施された鋭い刻目文帯からも曾谷式期と考えて矛盾はない。第十一図二は、頭部形状が楕円形を呈していることから山形土偶の中でも後出的であると考えるが、頸部には竹管による刺突列が巡り、瓦吹氏も指摘するように(瓦吹一九九七)、第十一図一とは多少の時間差があるものと思われる。加曾利B3式期に比定されよう。第十二図一は、小型の山形土偶であるが、先の第十図と同様、楕円形の頭部、縮約化した後頭部突起、小型化した乳房が特徴的で、腰部の文様は粗雑化していることから、曾谷式期と考えられる。山形土偶の後

例も同時期の可能性がある。ちなみに、上吉沢遺跡例のような土偶は、管見の限りでは栃木県御厨高松遺跡出土のものが知られるのみで(前澤一九六三)、両者とも該期の貴重な資料である。

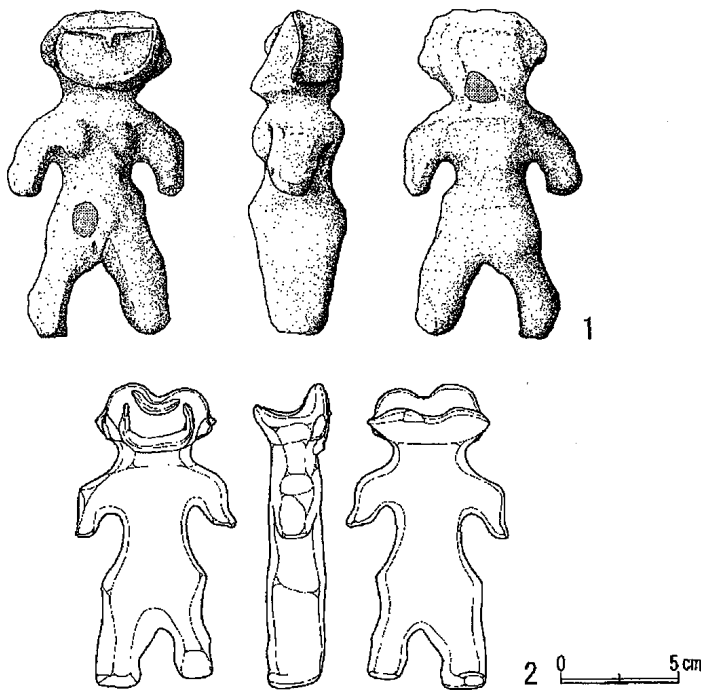
今回紹介した資料のうち多数を占めるのが山形土偶である。山形土偶の変遷については、瓦吹堅氏や上野修一氏らの研究があり(瓦吹一九九〇、一九九七、上野一九

半段階では小型のものが出現することが指摘されており（瓦吹一九九七）、その点からも矛盾はない。第十二図二は、腰部に弧線文が巡っているが、これが、第十図のものと比較すると整然としており、腹部が豊満で立体的な形状を呈することから、やや古手のものと判断され、加曾利B3式から曾谷式期に比定されよう。

次に上高津貝塚の山形土偶をみていきたい。第十四図一は無文で顔面や体部の表現がまったくくない山形土偶である。文様のない山形土偶はしばしば見受けられるが、本例のような顔面表現、体部表現が欠落する例は珍しい。埼玉県の高井東遺跡には、円形に顔の輪郭を作り、顔面部に眉と鼻のT字状隆帯、胴部に乳房を表現しただけの土偶が存在する（第二三図一）（埼玉県教育委員会一九七四・一九七五）。鈴木正博氏は、この土偶を曾谷式期に位置づけ、もはや山形土偶とは言えないと指摘している（鈴木一九八二）。上高津貝塚出土のものは、腕先が外にくびれる形態や顎の表現を意識していることからして山形土偶の範疇として捉えられ、おそらく加曾利B3式から曾谷式期にあたるのではないだろうか。ちなみに、茨城県前田村遺跡には、顔の輪郭をハート形に施した無文の土偶が出土している（第二三図二）（吹野ほか一九

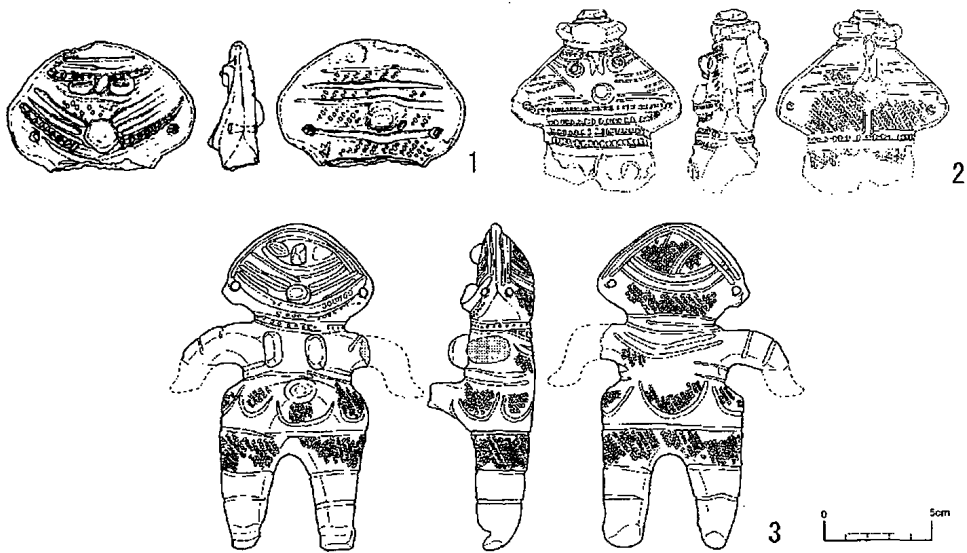
九九）。この土偶は頭頂部の形態からみみずく土偶の範疇で捉えられるものであるが、体部の形態は上高津例とも類似しており、身体装飾が省略されることから、上高津貝塚例との関係が興味深い。

第十四図二は、頭部の小破片のため時期の決定が難しいが、顔面部に多数の沈線が施される特徴にはいくつかの類例が存在する。千葉県吉高一本松遺跡（原田・新井一



第23図 無文の土偶
 (1：高井東遺跡 2：前田村遺跡)
 (埼玉県教育委員会1974、吹野ほか1999)

(九八五) や下太田貝塚(財団法人総南文化財センター二〇〇三) 内野第一遺跡(財団法人千葉市文化財調査協会二〇〇一) 出土例などがそれで(第二四図)、これらの土偶に見られる特徴や眉の隆帯上に鋭い刺突列が施されることを考え合わせると加曽利B3式から曾谷式期に比定できよう。第十四図三は、腹部の隆起が断面三角形を呈しており、腰部が強張り出す形態を有する。このような特徴は上野氏が提唱する金洗沢系列の指標でもあり(上野一九九一)、金洗沢系列は曾谷式期から出現することが指摘されており、本例も該期の所産であろう。第十四図四は、腰部の一部が残存する小破片であるが、施文手法を違えて弧線文と鋸歯状文を描いている珍しい例である。鋸歯状文やそれに類する弧線文は関東地方では基本的に茨城県と千葉県の山形土偶にしか見られない特徴であり、そのなかでも本例のような弧線が下開きのものは、千葉県奈土貝塚(高橋一九八二)に類似する文様を見ることができがその他にはほとんど存在しない。本例は時期の決定に苦慮するが、張り出した腰部や鋭い刺突列が存在することから曾谷式期と考えておく。第十五図一は、胴下半から腰部にかけての破片で、やはり時期比定に苦慮するが、やや張り出した腰部や、全体的に粗



第24図 顔に多数の沈線を持つ土偶

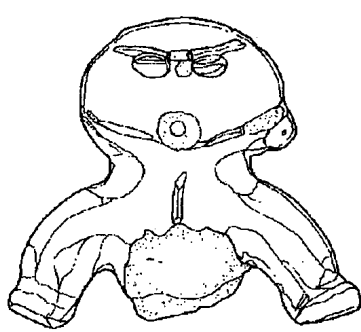
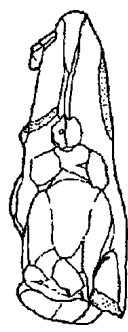
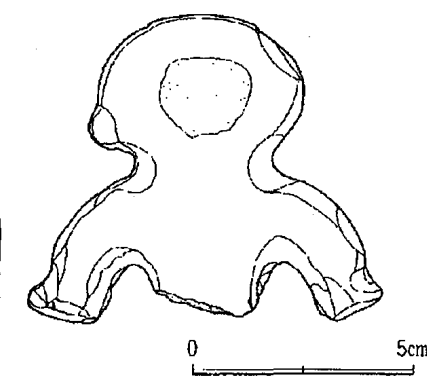
(1: 吉高一本松遺跡 2: 下太田貝塚 3: 内野第一遺跡)

(原田・新井1985、財団法人総南文化財センター2003、財団法人千葉市文化財調査協会2001)

雑な文様、つくりをしていることから、加曾利B3式から曾谷式期に比定したい。

鬼越貝塚（森戸貝塚）出土の資料は、第十五図四、五ともに脚部の小破片であるが、その形態から山形土偶であると判断する。

あると判断する。



第25図 井野長割遺跡出土土偶
(財団法人印旛郡市文化財センター2004)

次に、立木貝塚出土資料を見てみる。第八図一は、後頭部の突起が椎塚貝塚例のように突起状になっておらず（第十図、第十二図一）、頸部に楕円形の刺突列が巡ることから、より古い要素を残していると考え、加曾利B3式期に位置づけたい。第十八図二は、扁平な頭部、後頭部に逆C字状の粘土貼り付け、顔面部の刺突列など、より後出的要素を持って

おり加曾利B3式から曾谷式期と考える。後頭部の逆C字状の粘土貼り付けは、C字状のものも存在し、曾谷式期末の特徴として指摘されている（瓦吹・上野一九九二）。なお、このようなC字・逆C字状の粘土を貼り付ける山形土偶は、栃木・群馬県南部や埼玉県北部の県境地帯に分布が集中しており（井上二〇〇二）、立木貝塚の例はこの地域としては特異な例と言える。また本例は右耳の表現があったかどうかは判然としないが、山形土偶のなかには千葉県井野長割遺跡出土例のように左耳だけを表現するものも存在し（第二五図）（財団法人印旛郡市文化財センター二〇〇四）、本例も左耳だけを表現したものかもしれない。

以上、今回紹介した山形土偶についてその時期を述べてきた。上述したように、山形土偶に関しては、複数の系列に整理され、その変遷（瓦吹一九九〇、一九九七、上野一九八九・一九九二）、関東地方内における地域差も判明しつつある（「土偶とその情報」研究会一九九五、森脇一九九六、井上二〇〇二）。また、山形土偶からみずく土偶への変化も当該期の資料数が増加していることもあって、次第に解明されつつある（上野・瓦吹一九九二、井上二〇〇二）。しかし、そういった状態にあり

ながらも、いまだ問題は多く、特に関東地方の山形土偶がどのように成立したのかという点については、今もって明快な説明がなされていない。これは、堀之内式期に作られたハート形土偶や筒形土偶などと山形土偶との間に連続性が通れないことや、山形土偶成立の直前期にあたる加曾利B1式期の土偶の様相が十分に整理されていないことに原因がある。今後は、加曾利B1式期の土偶の様相を把握すると共に、山形土偶の初期段階にあたる加曾利B2式期の例がどのくらい存在し、どこに分布するのかということを検討しなければならない。さらに、東北地方では後期前葉から中葉にかけての土偶の変遷が比較的辿りやすく、安定して土偶製作を行っていた地域であることも判明してきている。こうしたことから、安孫子昭二氏や上野修一氏も指摘するように（安孫子一九九七、上野一九九九）、関東地方の山形土偶の成立に関しては東北地方を中心とした他地域との関連を視野にいれる必要がある。

次に、みみづく土偶の例をみていきたい。第十五図二は、みみづく土偶の胴部破片である。安行2・3a式土器を出土する層から発見されている。後面には体部の輪郭に沿うように施される沈線が存在し、この種の文様は

山形土偶の後半段階からみられるものである。また、この後面には縦長の細かい刻みが見られ、これは安行2式期の特徴としても捉えられることから、出土層位を勘案して安行2式期の所産と考えておきたい。

縄文時代晩期

今回紹介した資料のなかには、縄文時代晩期ものを二例見出すことができる。立木貝塚出土の二点がそれである（第十八図三、第十九図）。第十八図三は、一見すると山形土偶のような風貌をしているが、後頭部の渦巻文が晩期中葉の土偶に特徴的なものである。この渦巻文に関しては、安行3d式期になると二本一単位の渦巻文になることが指摘されており（植木一九九二、上野・瓦吹一九九二）、本例も安行3d式期に比定できよう。また、顔面部の眉と鼻のT字状の表現や、粘土粒に横沈線を施した目の表現は、千葉県西広貝塚にみられるように晩期中葉の土偶の特徴の一つでもある（上総国分寺台遺跡調査団一九七七）。本例のようにT字状隆帯や目の粘土粒上に刻みを施す例は、東北地方の大洞C₂式期遮光器土偶にも共通し、東北地方との関連が窺われる。第十九図は、脚部下端の中空の破片である。晩期の関東地方では安行3b式期後半以降、遮光器土偶を模倣した土偶が作られ

るようになり（浜野一九九二、金子一九九三）、晩期中葉以降のI字文や渦巻文を施した土偶のなかでも中空の土偶がつくられるようになる。本例も中空化した土偶であるが、このような形態を持つものは関東地方では類例に乏しい。こうした形態は、東北地方の結髪土偶や刺突文土偶に見ることができ、本例も晩期後葉の所産である可能性が高い。

関東地方における縄文時代晩期の土偶は、後期以来続くみずく土偶や東北地方の遮光器土偶を模倣した土偶などが知られているが、先に述べたように安行3c・3d式期には、I字文や渦巻文が施される土偶が作られる。こうした土偶は安行3c式期以降数が少なくなるのみみずく土偶と入れ替わるように登場し、「遮光器土偶の技法や形態を模倣しようとはしているものの、それ以上にこの地域独特とみられる要素を強くもったもの」（鷹野一九八三）、「形態受容系列」（鈴木一九八九）、「遮光器土偶の形式から刺激を受けて、新たな形式理念に基づく型式を実現したもの」（植木一九九三）、などと呼称されている。これらは、関東地方のみみずく土偶からの系譜というよりは、東北地方の遮光器土偶との関連で捉えられており、それらが在地化した土偶として説明されている

ようだ。堀越正行氏は、これらの土偶のうちI字文を持つものを「I字文土偶」として考察しており、千葉県を中心とする南関東地方に出土例が多いこと、安行3c式から3d式期にかけての変遷を示し、特に安行3d式期後半に出土点数が増えていることを明らかにした（堀越一九九三）。これに対して該期には、より遮光器土偶に近い形態を有する土偶も存在し、「遮光器系列」（鈴木一九八九）、「遮光器系土偶」（浜野一九九三、金子一九九三）などと呼ばれている。こうした遮光器系の土偶は、安行3c式期に多く作られたようである（金子一九九三）。

このように、関東地方における晩期中葉の土偶については、その様相が把握されつつあるものの、いまだ未解明な問題も存在する。以下にそれらをあげていくと、I字文や渦巻文が施されるより在地色のつよい土偶群と遮光器系の土偶群との関係を検証する必要がある。先行研究を参考にすれば、両者の間には盛行する時期に違いが見られ、分布域にも多少の差異がある可能性も考えられる。また遺跡ごとの様相を検討し、両者が同一遺跡内で共半するのかどうか、遺跡ごとに異なった土偶群を用いていたのかなどを考える必要がある。さらに、前者

の土偶群については、遮光器土偶からの影響、より在地化が進んだもの、というだけでなく、その系統や出自を、土偶にみられる各要素を抽出し、どういった系統的關係の中から成立しているのかを検討していくことも必要であろう。こうした作業にあたっては、東北地方の遮光器土偶との関係を偏重するのではなく、みみずく土偶からの系譜というものも考える必要があるだろうし、鈴木正博氏や植木弘氏の指摘にもあるように（鈴木一九八九、植木一九九三）、清水天王山式の土偶や西日本の土偶も視野に入れる必要があると考える。また、晩期後葉に位置づけられる土偶も出土例が知られており、こうした土偶との関係も考慮する必要があるだろう。該期の土偶については、「土偶とその情報」研究会による資料集成（埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会一九九二）以後、資料数の増加が見られ、以上挙げてきた問題点も踏まえ、資料の集成と再整理が必要であると思われる。

おわりに

以上茨城県出土の土偶について資料紹介を行い、そこから派生する問題について若干触れてきた。今回はこれらの問題に対して具体的な検討はできなかつたが、本稿

で紹介した土偶はこうした問題を考える上で有用な資料であると言える。また、冒頭でも触れたように、慶應義塾大学では本稿で紹介した以外にも多くの土偶を所蔵しており、それらの中には、今述べてきた問題に関連する資料も少なくない。今後は、そうした資料の整理作業・公開を通して、上述した問題についても答えていきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり慶應義塾大学の諸先生・先輩方には大変お世話になりました。また下記の方々からもご協力を賜りました。末筆ながら感謝申し上げます。

大澤輝嘉氏、及川良彦氏、川又清明氏、工藤やよい氏、栗山章氏、小薬一夫氏、近藤太郎氏、能登谷宣康氏、森田忠治氏、横山仁氏

なお、本稿は、二〇〇五年、二〇〇六年度学事振興基金「慶應義塾所有の国内考古資料の基礎的研究」（研究代表者・安藤広道）の研究成果の一部である。

（第一図については、カシミール3Dを用いて作成しました。）

註

(1) 色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参考にした。

(2) 茨城県立歴史館の図録『特別展 東国の土偶』においても、解説に戦災によって火を受けていることが記述されている(茨城県立歴史館一九九四)。

(3) 『茨城県史料Ⅱ考古資料編 先土器・縄文時代』には、宮平貝塚出土の骨角器、土製品などの写真図版が掲載されているが(茨城県一九七九、三〇五頁)、そのうち写真中央部より下の、石器、土製品は上高津貝塚出土資料の誤りである。これらの資料は、現在慶應義塾大学で保管しており、その内土偶については今回紹介する。

(4) 茨城県遺跡地図によると、現在、佐倉貝塚の名称は見当たらない(茨城県教育委員会二〇〇二)。佐倉貝塚の所在地とほぼ同地点には南平貝塚が存在し、筆者が南平貝塚を踏査したところ、池上啓介氏が提示した佐倉貝塚の地形図(第六図)とほぼ対応するように貝の散布する地点が確認でき、地形や寺院との位置関係も佐倉貝塚の地形図とほぼ一致した(池上一九四三)。このことから、現在の南平貝塚が、大山史前学研究所の調査した佐倉貝塚であると感じて間違いないであろう。ちなみに、筆者の踏査では、大山史前学研究所のA・C点にあたる地点で土器や貝の散布が確認でき、台地上に存在するB・D点については、明確な貝の散布は確認できず、台地上には僅かに碎片化した土器や貝の散布が所々に見受けられた。

C点にあたる緩斜面一帯には、特に貝や土器の散布が著しく、土器も他の地点に比べて大形の破片が目立った。

(5) ちなみに、大山史前学研究所調査資料の宮平貝塚出土土偶と佐倉貝塚出土土偶が、現在の様な黒色化、接合の痕跡を持って公開されたのは、管見の限りでは一九六四年発行の『日本原始美術2 土偶・装身具』が最初と思われる(甲野一九六四)。ここでは、両土偶は大山史前学研究所旧蔵と紹介されている。

(6) 椎塚貝塚の土偶については、第十図、第十一図一・二、第十二図二に関しては、瓦吹堅氏による資料紹介、論考がある(瓦吹一九九七)。今回の資料紹介では、瓦吹氏の報告と重複するところがあるが、瓦吹氏の実測図では背面が掲載されていない個体があるため、これらも合わせて報告することとした。

(7) 現在接合されている胴部の破片は、『茨城県史料Ⅱ考古資料編 先土器・縄文時代』では、未接合の状態に掲載されており、二八二頁下から四段目左から二つ目の乳房部の破片と、下から二段目右から二つ目の胴部(背面で掲載)の破片が接合し一個体となったものである(茨城県一九七九)。

(8) 七郎内C遺跡、法正尻遺跡の資料の観察にあたっては、福島県文化財センター能登谷宣康氏にお世話になった。また、当該期の資料については福島大学工藤やよい氏から有益なご意見を賜った。あわせて感謝したい。

(9) ただし、東京都中高瀬遺跡には、頭頂部に土器の突起と類似した装飾を施す土偶が出土しており、仮称「中高

瀬タイプ」と名付けられている（東京都埋蔵文化財センター二〇〇七）。また、静岡県杉田中村遺跡からも頭頂部に土器の突起と類似した装飾を施すほぼ完形の土偶が出土している（江坂一九六〇、一九九〇、瀬川一九九二）。

これらの土偶は加曾利B1式からB2式期に位置づけられると思われる、ハート形土偶や山形土偶に見られる特徴を有しつつも、それらとはやや異なる土偶として位置づけられる。この他にも、頭頂部に突起を有するハート形土偶や筒形土偶などは存在し、鈴木正博氏は、ハート形土偶と山形土偶の間に「突起形土偶」が存在すると指摘している（鈴木一九九五）。後述するように、山形土偶がどのように成立したかについては不明な点が多く、これらの土偶はそうした問題を考える上でも重要な資料であろう。

引用参考文献

- 安孫子昭二一九九七「関東地方縄文後期の動態」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
- 阿部明彦一九九六「中期大木式期の様相」『土偶シンポジウム4 長野大会 中部高地をとりまく中期の土偶 シンポジウム発表要旨』「土偶とその情報」研究会
- 阿部明彦一九九八「中期大木式期の様相」西ノ前タイプ土偶の出現と展開」『土偶研究の地平2』「土偶とその情報」研究会
- 阿部芳郎二〇〇四『失われた史前学』岩波書店
- 池上啓介一九四三「茨城県稲敷郡鳩崎丘陵貝塚群調査報告」

告」『史前学雑誌』一五・一 史前學會

池田晃一 一九九八「阿玉台式期の土偶の様相」2つの地域性について」『土偶研究の地平2』「土偶とその情報」研究会

池田晃一・瓦吹堅 一九九六「阿玉台式期の様相」『土偶シンポジウム4 長野大会 中部高地をとりまく中期の土偶 シンポジウム発表要旨』「土偶とその情報」研究会

石坂茂 一九九六「関東地方東北部地域の土偶と土器型式の様相」『土偶シンポジウム4 長野大会 中部高地をとりまく中期の土偶 シンポジウム発表要旨』「土偶とその情報」研究会

市川博物館 一九八〇『千葉県の土偶』市立市川博物館図録 九

井上武二二〇〇二「山形土偶の地域性と変遷」北関東地方を中心に」『群馬県考古学手帳』二二 群馬土器観会

茨城県 一九七九『茨城県史料Ⅱ考古資料編 先土器・縄文時代』

茨城県教育委員会 二〇〇一『茨城県遺跡地図 地図編』

茨城県教育委員会 二〇〇一『茨城県遺跡地図 地名表編』

茨城県立歴史館 一九九四『特別展 東国の土偶』

植木弘 一九九二「安行期におけるみみずく土偶以外の土偶」遮光器土偶系統及びその他の系統」『シンポジウム縄文時代後・晩期安行文化」土器型式と土偶型式の出会い」発表要旨』埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会

植木弘 一九九三「安行期土偶の研究その1」山形土偶系統と遮光器土偶系統の展開」『埼玉考古』三〇 埼玉考古学

会

上野修一 一九八九・一九九一「北関東地方における後・晩期土偶の変遷について(上)・(下)」栃木県藤岡市後藤遺跡出土土偶を中心として」『栃木県立博物館紀要』六・八 栃木県立博物館

上野修一 一九九九「遺物研究 土偶(後期土偶)」『縄文時代』十 縄文時代文化研究会

上野修一・瓦吹堅 一九九二「ミニッツク土偶の変遷」『シンポジウム縄文時代後・晩期安行文化・土器型式と土偶型式の出会い』発表要旨」埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会

上野修一・瓦吹堅 一九九二「安行式期における、ミニッツク土偶・遮光器土偶以外の土偶の概要(北関東を中心に)」『シンポジウム縄文時代後・晩期安行文化・土器型式と土偶型式の出会い』発表要旨」埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会

江坂輝彌 一九六〇『土偶』校倉書房

江坂輝彌 一九九〇『日本の土偶』六興出版

江坂輝彌ほか 一九六四「平塚市上吉沢敷石遺跡調査」『平塚市文化財調査報告書』第五集 平塚教育委員会

大山柏・大給尹 一九四〇「茨城県舟嶋村官平貝塚群調査報告」『史前學雜誌』二二・四・五・六 史前學會

小野美代子 一九九九「遮光器土偶の受容と遮光器系土偶」『土偶研究の地平3』「土偶とその情報」研究会

上総国分寺台遺跡調査団 一九七七『西広貝塚・上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ』早稲田大学出版部

金子昭彦 一九九三「関東地方の遮光器系土偶・東北地方の遮光器土偶との異同」『埼玉考古』三〇 埼玉考古学会

瓦吹堅 一九九〇「山形土偶」『季刊考古学』三〇 雄山閣出版

瓦吹堅 一九九七「山形土偶・椎塚貝塚の様相」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会

慶應義塾高等学校考古学会 一九五一「茨城県稲敷郡舟島村官平貝塚調査概報」『archaeology』一一一

慶應義塾高等学校考古学会 一九五四「茨城県土浦市上高津貝塚発掘報告」『archaeology』一九

慶應義塾高等学校考古学会 一九五五「茨城県行方郡津澄村繁昌鬼越貝塚発掘報告」『archaeology』一一一

慶應義塾大学考古学研究会 一九七〇『慶應義塾大学考古学研究会報告』一

慶應義塾中等部考古会 一九五〇『茨城県稲敷郡椎塚貝塚』甲野勇 一九六四『日本原始美術2 土偶・装身具』講談社

国立歴史民俗博物館 一九九二『国立歴史民俗博物館研究報告』第二七集

小林謙一 一九九七「茨城県官平貝塚出土土器について(1)」『民族考古』大学院論集』四 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

小林謙一 二〇〇一「茨城県官平貝塚出土土器について(2)」阿玉台I・b・II式を中心に」『民族考古』五 慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

小宮孟 一九七〇「捕獲対象魚の変化からみた漁撈活動の側面 特に上高津貝塚を中心として」『慶應義塾大学考古学

研究会報告』一 慶應義塾大学考古学研究会

小宮孟 一九八〇「土浦市上高津貝塚産出魚貝類の同定と考察」『第四紀研究』一九一四 日本第四紀学会

小宮孟・鈴木公雄 一九七七「貝塚産魚類の体長組成復元における標本採集法の影響について」特にクロダイ体長組成について」『第四紀研究』一六一一 日本第四紀学会

埼玉県教育委員会 一九七四『高井東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第四集

埼玉県教育委員会 一九七五『高井東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第五集

埼玉考古学会・「土偶とその情報」研究会 一九九二「シンボジウム縄文時代後・晩期安行文化」土器型式と土偶型式の出会い」『埼玉考古』別冊四一三

財団法人印旛郡市文化財センター 二〇〇四『千葉県佐倉市井野長割遺跡(第4次調査)』佐倉市井野東土地地区画整理

事業地内埋蔵文化財調査」財団法人印旛郡市文化財センター 発掘調査報告書第二〇五集

財団法人総南文化財センター 二〇〇三『千葉県茂原市下太田貝塚』かんがい排水事業(排水対策特別型)新治地区埋蔵文化財調査業務」財団法人総南文化財センター調査報告第五〇集

財団法人千葉市文化財調査協会 二〇〇一『千葉市内野第一遺跡発掘調査報告書』

財団法人福島県文化センター 一九八二『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告X』福島県文化財調査報告書第一〇八集

財団法人福島県文化センター 一九八二『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告X』福島県文化財調査報告書第一〇八集

財団法人福島県文化センター 一九九一『東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』福島県文化財調査報告第二

四三集

齊藤弘道・磯前順一 一九八七「東・北関東の中期土偶」茨城県網掛遺跡採集資料の紹介を通して」『婆良岐考古』

九 婆良岐考古同人会

サントリイ美術館 一九六九『土偶と土面』杉原莊介・戸沢充則 一九六五「茨城県立木遺跡」『考古学集刊』三一 東京考古学会

鈴木正博 一九八二「埼玉県高井東遺跡の土偶について」『古代』七二 早稲田大学考古学会

鈴木正博 一九八九「安行式土偶研究の基礎」『古代』八七 早稲田大学考古学会

鈴木正博 一九九四「書評『特別展 東国の土偶』から1題」『茨城県考古学協会誌』六 茨城県考古学協会

鈴木正博 一九九五「土偶インダストリ論」から観た堀之内2式土偶」土偶の編年的位置は土器から、土偶間の動特性は土偶から」『茨城県考古学協会誌』七 茨城県考古学協会

瀬川裕市郎 一九九二「静岡県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三七集 国立歴史民俗博物館

鷹野光行 一九八三「安行の土偶覚書」『歴史公論』九 雄山閣出版

高橋博文 一九八二「奈戸貝塚出土の土偶」『研究連絡誌』一

財団法人千葉県文化財センター

田川良 一九九六「山形土偶を理解する為に(1)」『奈和』

三四 奈和同人会

武内博志・安達香織 二〇〇五「木更津市葭ヶ作貝塚採集の縄文時代資料について」『東邦考古』二一九 東邦考古学研究会

東京都埋蔵文化財センター 二〇〇七「あきるの市中高瀬遺跡―秋多3・3・9号線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第二〇一集』

『土偶とその情報』研究会 一九九四『土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶Ⅰ（土偶の出現から遮光器土偶の成立前まで）』

『土偶とその情報』研究会 一九九五『土偶シンポジウム3 栃木大会 関東地方後期の土偶―山形土偶の終焉まで―』

『土偶とその情報』研究会 一九九五『土偶シンポジウム3 栃木大会 関東地方後期の土偶（山形土偶の終焉まで）シンポジウム発表要旨』

『土偶とその情報』研究会 一九九六『中部高地をとりまく中期の土偶』

永峯光一 一九七七「呪的形象としての土偶」『日本原始美術大系3 土偶埴輪』講談社

西村正衛 一九七三「阿玉台式土器編年の研究の概要―利根川下流域を中心として―」『早稲田大学院文学研究科紀要』一八 早稲田大学院文学研究科

日本考古学協会 一九五四『日本考古学年報』一一
浜野美代子 一九九二「安行期の土偶―いわゆる木菟土偶について―」『シンポジウム縄文時代後・晩期安行文化―土器型式と土偶型式の出会い―発表要旨』埼玉考古学会・

「土偶とその情報」研究会

浜野美代子 一九九三「遮光器系土偶についての考察」『研究紀要』十（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

原田昌幸 一九九六「縄文時代中期土偶の研究課題―「土偶とその情報」研究会」松本大会に参加して―」『奈和』三四 奈和同人会

原田昌幸・新井和之 一九八五「印旛沼周辺における低地遺跡の研究―印旛沼吉高一本松遺跡出土資料報告―」『奈和』二二三 奈和同人会

平塚市 一九九九『平塚市史』11上 別編考古（1）
平野誠一・西田裕彦 一九五一「椎塚貝塚発掘記」『中等部』一九五一年 慶應義塾中等部

吹野富美夫ほか 一九九九「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4 前田村遺跡G・H・I区」茨城県教育財団文化財調査報告第一四六集

堀越正行 一九九三「I字文土偶、その系統と分布」『埼玉考古』三〇 埼玉考古学会
前澤輝政 一九六三「栃木県足利市御厨高松遺跡の研究」足利市教育委員会

森脇淳 一九九六「山形土偶における属性と地域性―頭部の属性を中心として―」『史学研究集録』二二 國學院大學大学院日本史学専攻大学院会

山崎和巳 一九九五「板状土偶とその他の土偶」『土偶シンポジウム3 栃木大会 関東地方後期の土偶（山形土偶の終焉まで）シンポジウム発表要旨』
「土偶とその情報」研究会
山内幹夫 一九九四「大木式土器の土偶② 東北地方南部縄

文時代中期の土偶―福島県・山形県の資料を中心にして
― 『土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶
I シンポジウム発表要旨』 「土偶とその情報」研究会

表1 慶應義塾大学所蔵土偶一覧表 (2007年4月現在)

茨城県

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1 (第4図)	宮平	中期		胴		大山史前学研究所調査資料
2 (第5図)	宮平	中期		胴下半	15 J 102	
3 (第8図)	佐倉	中期		胴下半		大山史前学研究所調査資料
4 (第10図)	椎塚	後期	山形	ほぼ完形	19 J 202	
5 (第11図1)	椎塚	後期	山形	頭～胴	19 J 203	赤彩
6 (第11図2)	椎塚	後期	山形	頭～胴	19 J 204	
7 (第12図1)	椎塚	後期	山形	ほぼ完形	21 J 101	
8 (第12図2)	椎塚	後期	山形	胴～脚	19 J 205	
9 (第12図3)	椎塚	後期	ハート形	脚		赤彩
10 (第14図1)	上高津	後期	山形	頭～胴	21 J 150	赤彩
11 (第14図2)	上高津	後期	山形	頭	21 J 151	
12 (第14図3)	上高津	後期	山形	腰～脚	21 J 152	赤彩
13 (第14図4)	上高津	後期	山形	腰	21 J 153	
14 (第15図1)	上高津	後期	山形	胴	21 J Lok 1 N.1	「21 J C 6 KI No.1 '68.7.24」のラベル
15 (第15図2)	上高津	後期	みみずく	胴		「21 J 07-11 4層下集積 '69.7.30」のラベル
16 (第15図3)	鬼越	後期		胴	23 J 151	赤彩
17 (第15図4)	鬼越	後期	山形	脚	23 J 152	
18 (第15図5)	鬼越	後期	山形	脚	23 J 170	
19 (第18図1)	立木	後期	山形	頭		赤彩 「え」のシール
20 (第18図2)	立木	後期	山形	頭		
21 (第18図3)	立木	晩期		頭		赤彩
22 (第19図)	立木	晩期		脚		脚部が中空

千葉県

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	牛熊	後期	山形～みみずく	頭～胴	9 J 51	赤彩
2	牛熊	後期	山形?	腰～脚	9 J 52	赤彩
3	牛熊	後期?	みみずく	頭	9 J 53	
4	山武姥山	後期	山形	頭～胴	J 11 C'面	
5	山武姥山	後期	山形?	胴	11 J 117	
6	山武姥山	晩期		胴	J 11 混貝土	赤彩 中空
7	山武姥山	晩期		腕～胴	J 23 混貝土下層2	中空
8	山武姥山	晩期		脚	J 24 カメ棺	
9	山武姥山	晩期		胴	J 25,26 混貝土 No.29	

慶應義塾大学所蔵の土偶について

一一五 (一一五)

10	山武姥山	晩期	遮光器	頭	J 26 混貝土下層	赤彩 中空
11	山武姥山	晩期	みみずく ?	脚	J 26 黒褐色土下層 No.4	
12	山武姥山	晩期		胴～脚	J 33 第2 焼土 No.2	赤彩 体部中心に木芯痕
13	山武姥山	晩期		脚	J 33 第2 焼土 No.4	
14	山武姥山	晩期?	みみずく	脚	11 J 116	
15	山武姥山			顔	11 J 109	後期ハート形? 晩期の可能性も
16	山武姥山	不明	不明	腕 or 脚	J 23 混貝土下層 2	
17	山武姥山	不明	不明	脚	J 34 黒褐色土 No.10	
18	山武姥山?			脚?	J 140	木芯痕
19	山武姥山	晩期	中空みみずく	首～肩		中空 赤彩 「11 J-4 E 4 混土貝層 16 と 2 の中間' 63.8.17」のラベル
20	山武姥山			脚部		「11 J-4 E 4 黒褐色土層 '63.8.13」のラベル
21	山武姥山	晩期		腕		「11 J-4 E 7 混土貝層 3」のラベル
22	長割	後期	山形	脚	A 1-33	
23	長割	後期	山形	脚	A 21-31	
24	長割	晩期?	みみずく	脚	A 8-10	
25	長割	晩期	中空みみずく	頭	D 1-12	中空
26	長割	晩期		胴	A 21-9	中空
27	長割	晩期		胴	Q-3	
28	長割	晩期		脚?	A 9-17	I 字文
29	長割	晩期		頭	C 4-20	中空
30	長割	晩期	中空みみずく	頭～胴	C 13-10	中空
31	長割			脚	C 14-13	
32	葎ヶ作	晩期		脚	葎ヶ作寄贈	中空赤彩(武内・安達 2005)で報告済

神奈川県

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	上吉沢	後期		頭～胴		

東京都

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	(千歳船橋)	中期		頭～胴	J 101	寄贈資料

2	(打越、寺山)	後期?	山形?	頭		江坂輝彌表採資料 (昭和15年3月8日)
3	(広袴)	後期	ハート形	脚	J 125	寄贈資料

青森県

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	三内	中期		胴下半	17 J 101	
2	三内	中期		腕?	17 J 102	
3	三内	中期		胴下半	17 J 103	
4	三内	中期		胴下半	17 J 104	
5	三内	中期		胴下半	17 J 106	
6	三内	中期		胴下半?	17 J 109	
7	三内	中期		腕	17 J 122	
8	三内	中期		胴?	17 J 124	
9	三内	中期		頭~胴	17 J 131	
10	三内	中期		腕?	17 J 132	
11	三内	中期		腕?	17 J 133	
12	三内	中期		胴下半?	17 J 134	
13	三内	中期		胴	17 J 136	
14	三内	中期		胴下半	17 J 137	
15	三内	中期?		脚?	17 J 141	中空? 土偶でない可能性も
16	三内	中期?		脚?	17 J 142	土偶でない可能性も
17	長根	中期		頭~胴		
18	最花	中期末~ 後期初頭		頭~胴	最花	腕部付根に貫通孔
19	亀ヶ岡(泥炭層)	晩期	遮光器	頭		
20	亀ヶ岡	晩期?		腕~胴	2 J 151 K	赤彩 体部のみ中空
21	亀ヶ岡	晩期		脚	2 J 152	中空
22	亀ヶ岡	不明	不明	脚	2 J 103	
23	亀ヶ岡	晩期				
24	亀ヶ岡	晩期				
25	亀ヶ岡	晩期				
26	亀ヶ岡	晩期				
27	寺下	晩期	遮光器	腕~胴		腕は中空か
28	寺下	晩期?		頭~胴		
29	寺下	晩期	遮光器	胴		
30	寺下	晩期	遮光器	脚		
31	寺下	晩期	遮光器	胴		中空
32	寺下?	晩期	X字形	完形		赤彩
33	寺下	不明	不明	乳房?		赤彩

34	八幡	晩期	遮光器	頭～胴		赤彩 中空
35	八幡	晩期	屈折像	胴～脚	アオモリ三戸郡○村 八幡	
36	佐井八幡堂	弥生		頭		
37	佐井八幡堂	弥生		頭		
38	佐井八幡堂	弥生		胴		
39	野面平	晩期	遮光器	頭		頭部中空
40	鱒沢	晩期	遮光器	頭～胴	鱒沢	赤彩
41	平館	晩期		胴	J 127	
42	剣吉荒町	晩期	刺突文	頭、胴、 胴～脚	昭和二十九年 十一月二十二日	赤彩 中空
43	砂沢	弥生?		頭		
44	尻屋崎	晩期	遮光器	脚	JSS 245	中空

岩手県

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	松尾	晩期	遮光器	胴～脚	JSM 104	
2	松尾	晩期	遮光器	ほぼ完形	JSM 106	赤彩
3	松尾	晩期	遮光器	胴～脚	JSM 107	足裏に孔
4	松尾	晩期	遮光器	胴	JSM 109	中空
5	松尾	晩期	遮光器	胴～腕	JSM 110	
6	松尾	晩期	遮光器	胴～脚	JSM 111	
7	松尾	晩期	遮光器	腰?	JSM 112	
8	松尾	晩期	遮光器	胴～脚	JSM 115	
9	松尾	晩期	遮光器	胴	JSM 116	
10	松尾(鉾山脇)	晩期	刺突文	胴		赤彩
11	戸類家 (易国津波貝塚)	晩期	結髪	ほぼ完形		
12	戸類家 (易国津波貝塚)	晩期		ほぼ完形		
13	波板	後期	ハート形	頭		目・口にアスファルト

新潟県

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	城倉	中期		腕?	城倉	

不明

No.	遺跡名	時期	型式名	残存部位	注記 No.	備考
1	ウワノ(UENO)	中期		頭	上 3009	
2	ウワノ(UENO)	後期		胴	上 3008	
3	ウワノ(UENO)	晩期	遮光器	胴～脚	上 3001	中空

4	ウワノ(UENO)	晩期	遮光器	頭	上(J)3003	赤彩 中空
5	ウワノ(UENO)	晩期	遮光器	頭～胴	上 3005	頭部のみ中空
6	ウワノ(UENO)	晩期	遮光器	頭	上 3006	
7	ウワノ(UENO)	晩期	遮光器	胴～脚	上 3007	
8	ウワノ(UENO)			腕?	上 3004	土偶でない可能性も
9	ウワノ(UENO)	不明		腕?	上 (J) 3002	中空
10	新宮	中期?		胴	新宮	
11	瀬(瀬?)沢	後期	山形	頭		「瀬沢 B-23層 No.27 41.11.23.」のラベル
12	尻矢	晩期	刺突文	腕		「尻矢 106号 土偶 腕 1955・2・4」のラベル
13	不明	中期		胴下半		
14	不明	後期	ハート形	脚	Hd 47	
15	不明	後期	ハート形	脚	Hd 20	
16	不明	後期	ハート形	脚	Hd 22	
17	不明	後期	みみずく	腰～脚	出土地不詳	
18	不明	晩期	遮光器	脚部		赤彩 中空
19	不明	晩期	遮光器	脚部	縄紋式○○・・	中空